

395
45



始



395-45



人生と趣味

黒田 勝心 著



自序

回顧すれば今月は私が赤門を出て、正に滿十年である。即ち明治四十三年七月大學を出てから半年は原稿生活をなし、四十四年の二月から大正二年の二月まで滿三年『讀賣新聞』記者生活を送り、ついで『趣味叢書』を出版する傍ら『建築畫報』、『美術週報』を主宰する事各一年。大正五年一月『趣味之友』を創刊し、これを主幹する事一年半。會々兒童教養研究所の設立に際し、入つて其の理事となつたが、一年有餘にして不幸にも同所の組織變更となり、乃ち大正七年七月三越吳服店に入り、今

月は入店後恰も満二年である。

十年間に随分轉々はしてゐるが、一貫してゐるのは活字に親しむの一事である。まづ『讀賣新聞』を振出しとし『趣味叢書』『建築畫報』『美術週報』『趣味之友』『兒童』これは兒童教育研究所から出た月刊雑誌であつた『三越』と、一新聞、一週刊雜誌、一叢書、四月刊雜誌の編輯に従事し、現に『三越』の編輯をやつてゐる。

實は三越へ入る時は、もういゝ加減に活字と縁を遠くし、趣味と實業的方面とを結び付けた仕事に従事したいと思ひ、三越にも其の了解を得て入つたのであるが、先任者松居松葉氏が突然三越を出られたので、其の御鉢が私に廻つて、又もや活字と

親しむ事となつたのである。こちらで遁げやうと思つても、活字の方から追ひかけて來るものと見える。

さうして『三越』を編輯する傍ら、矢張時々他の雜誌や新聞にも書いてゐた。そんな事で本書も出來た譯であるが、もはや今後遠からずして活字との縁を切りたいと思つてゐる。今は三越の使用人であるから、果して其の時機が何時來るか自分にもわからないが、遅かれ早かれさう云ふ時機は必ず來ると思ふ。自分の仕事として今半途になつてゐる『大日本美術史』は、今年の中に第四卷と第五卷を出して完結せしむる筈であるから、此の方は今後半年で縁を切る事が出来る。

或はその『大日本美術史』と本書で活字との縁が切り得るか、
或は又更に本書の續編を出して活字との縁が切れるか？ 兎に角
私は今三十六歳であるから、四十歳迄には縁を切りたいと思つ
てゐる。さうして六十歳近くにでもなつたら、又活字の御厄介
になりたいと思ふ。

四

大正九年七月

青山居にて

著者

凡例

- 一 本書は主として大正五年から同九年の夏までに至る雜稿を集めたものである。之れを一冊の書物とするに當つて、(一)『趣味講壇』、(二)『四季の趣味』の外(三)趣味の全般に關するもの、(四)建築及趣味の歴史に關するもの、(五)繪畫及文展、帝展、國展等に關するもの、五つに分けて列べた。
- 一 其の内『趣味講壇』と『四季の趣味』とは、共に大正五年、余の主宰した雜誌『趣味之友』に掲げたものに今回三四の新稿を加へ、何れも必しも執筆年月の順によつて居ない。
- 一 要するに本書は、曩に余が出版した『趣味雜話』、『建築雜話』、『青山より』、『趣味を求めて』に次いだもので、全く同性質のものである。
- 一 始め本書を編するに當つては、都市と建築に關するもの、建築全般に關するもの

凡例

一

二
の、庭園に關するもの、流行に關するもの等をも加へる筈であつたが、餘り頁數
が増加するので、止むを得ず割愛して、之れ等は續篇の中に加へる事とした。

人生と趣味

目次

趣味講壇

「趣味」の意義……………	一
○長壽と趣味……………	一五
○貧乏と趣味……………	一九
○意氣と上品……………	二三
立太子禮と趣味の發現……………	二六
「單純」の趣味……………	三一
「繰返し」の趣味……………	三八
「調和」と「釣合」の趣味……………	四四

四季の趣味

春の趣味	五〇
新緑の趣味	五八
雨の趣味	七二
夏の衣食住の趣味	七九
山の趣味	九〇
水の趣味	九七
新秋の趣味	一〇〇
秋の趣味	一〇五
冬の趣味	一〇九
冬の住宅の趣味	一一三

趣味教育について

婦人の勢力と趣味生活

趣味教育について	一一八
婦人の勢力と趣味生活	一四六
日本建築の本流と支流	一五七
時代と文化と偉人	一八九
造形美術に現はれたる日本趣味の變遷	二二三

繪畫の觀方 附リ、彫刻と建築の觀方

繪畫の觀方 附リ、彫刻と建築の觀方	二三三
文展十二年史	二五三
新書壇の中堅と花形	三三三
文展と工藝美術	三三二
第十二回文展の日本畫を評す	三四四

第一回國畫創作協會展覽會を評す 三六一

廣業歿後の日本畫壇 三七九

帝國美術院の創設 三九〇

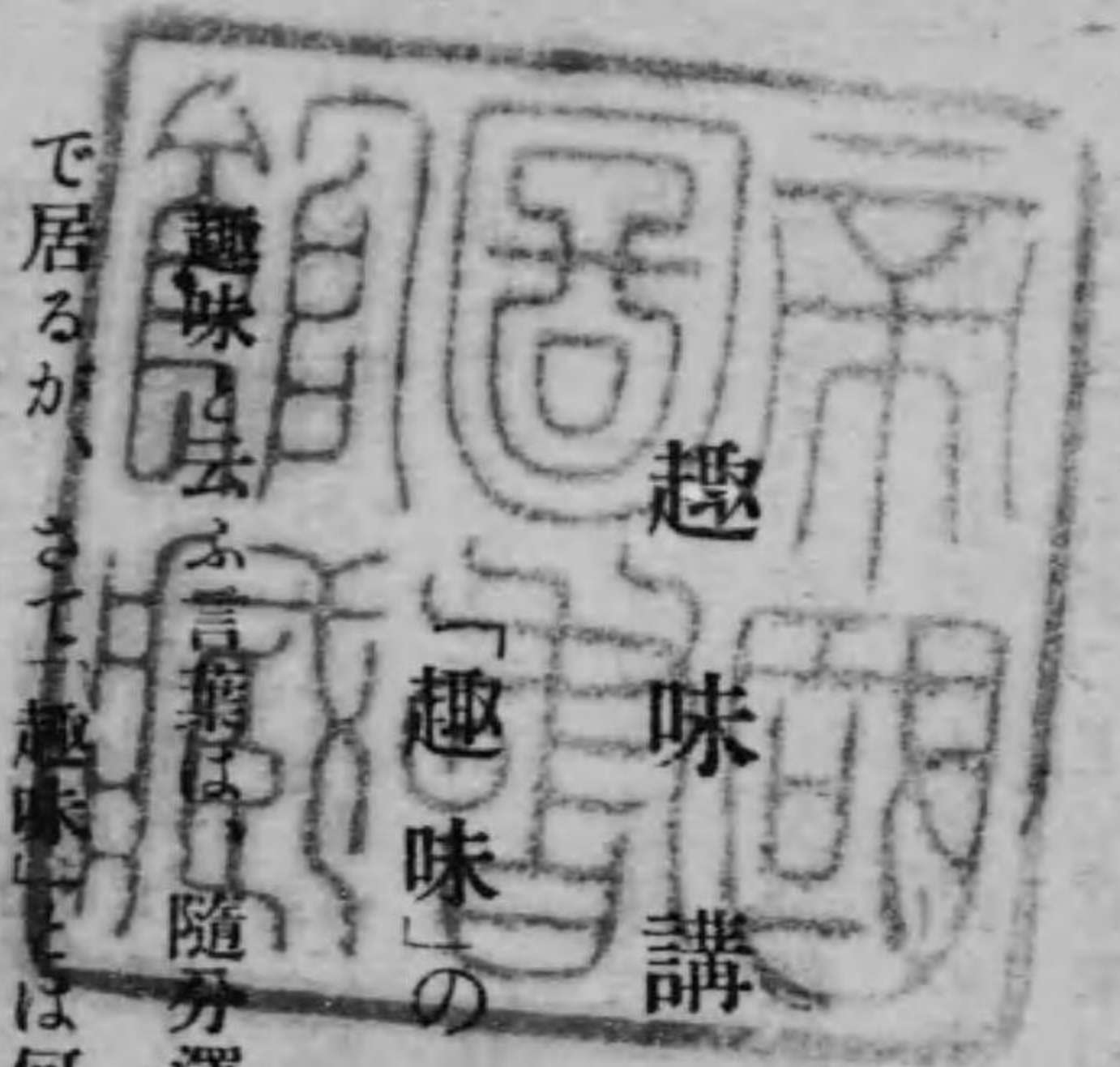
第一回帝展の日本畫を評す 四一一

第二回國畫創作協會展覽會を評す 四三四

屏繪 著者 近影
 裝釘 杉浦非水氏

人生と趣味

文學士 黒田鵬心 著



趣味講壇 「趣味」の意義

で居るが、さういふ「趣味」とは何であるか、と訊かれると、一寸返答に詰まる人が多いのであります。又其の答へをきいても趣味といふ意味は區々に解せられてゐる。とにかく頗る曖昧な言葉で誰にも解かつてゐながら、明確に其の意味を掴んでゐる人は尠いと云つて可いと思ふ。そこで私は先づ本書が其の題名としてゐる所の「趣味」

「趣味」の意義

に就いて、一通り解釋を與へて置きたいと思ふのであります。

「味ふ」といふのが主

「趣味」といふ言葉は、今日は非常に區々に使はれてゐます。例へば「あの人の趣味はよい」、「あの人は繪に趣味を持つ」、「あの人の趣味は道具にある」、「あの人は花に趣味がある」、「あの人は酒の趣味を解する」、「あの人は近頃碁に趣味を持ち始めた」、「あの人は商業に趣味を持つ」、「この室は趣味がある」、「この衣服の趣味は悪い」など、云ひ、又「日本趣味」、「江戸趣味」、「都會趣味」、「田舎趣味」、「貴族趣味」、「ハイカラ趣味」、「花柳趣味」など、云ふ言葉もある。此の世の中に全然趣味なき人がなく、又全然趣味なき物も無い以上、「趣味」といふ言葉が澤山に又區々に用ひられるのも當然の事であります。併し、とにかく、言葉の上から云ふと、「味ふ」といふ字に主な意味のある事は、英語のテースト (Taste) といふ字を見てもわかる。而して「味ふ」のは人であつて、味はれるのは物でありますから、趣味は人間

の働きである、難しく云へば趣味といふ事が主観的のものである事は確かでありま
す。故に前に例へに擧げた「あの人は……」と、人を主としてゐるのは正しい使
ひ方で、「此の室は」とか、此の「衣服は」と、物を主としたのは、言葉の轉用で、多
くの人の趣味に合ふ室とか、多くの人がよい趣味だとする衣服とか云ふ意味であり
ます。又「日本趣味」とか「江戸趣味」といふのは、「日本人の趣味」、「江戸時代の人の
趣味」といふ意味である。猶「都會趣味」は都會人の趣味、其他皆同じであります。
唯あの例への内で碁とか商業とか云ふものを趣味といふのは、轉用以外の事で、興
味といふべきを誤つたものであります。その譯はあとで述べる。

根本は食慾

趣味が主観的のもので、「味ふ」といふのが主な意味とすると、「味ふ」のは云ふま
でもなく、舌であります。即ち舌で物の味を味ふといふのが趣味の根本義である。
換言すれば食慾が趣味の根本である。人間の最も原始的の慾望は食慾と色慾とに在

ると云ふ事でありませんが、趣味はその人間の原始的慾望に根ざしてゐるのであります。趣味といふと非常に高尚な言葉に聞こえますが、其の根本義は、一見下等な又寧ろ趣味と関係なきが如き食慾に在るので、そこが却つて面白くもあり、趣味の價値ある所である。何となれば趣味が、食慾と云ふ人間の原始的な、云はば根本的の慾望に根ざしてゐるといふ事は、趣味が眞劍のものである事を意味するからであります。

食慾から美慾へ

併し趣味が唯人間の根本的慾望に根ざしてゐる丈けでは、趣味の趣味たる價値が無い。然らば何によつて趣味の價値を發揮するかと云ひますと、曰はく進歩であります、發達であります、洗練であります、向上であります。しかも其の進歩たるや實に驚くべきものがあるのであります。

食慾は無論舌によつて味ふのが本來の事ではありますが、しかし決して舌のみでは

満足出来ません、といふのは人は決して舌のみを持つてゐるのではなく、眼もあれば耳もあるからであります。乃ちこの眼や耳や體軀を遊ばして置くのは、つまらぬ事で、之れを以つて、舌の足りない所を味ひ始めたのであります。而して一度眼を使ひ始めると、舌では全然味へなかつた色が味へる、不十分であつた形も味へる。又耳を使へば、これも舌では全然味へなかつた音が味へる。しかし眼や耳で味ふ世界と、舌で味ふ世界とは、大なる差がある。如何なる差があるかと云ふに、第一に眼や耳は舌よりも微妙な働きを持つて居りますから細こまかに味へます。第二に生活に直接の關係がない。眼や耳で味はつても腹はふくれぬ。舌の場合は吐き出せばとにかく、普通は嚥下して腹をふくらせます。

色慾も亦人間の原始的慾望、即ち根本的慾望であります。それも矢張發展してまづ身體の一局部から全體に及び、一轉しては矢張眼と耳に來ます。即ち對手の美しき容色、妙なる音聲によつて色慾が満足するのであります。茲に於いて食慾と色

慾とは、相共に、眼(視覚)と耳(聴覚)とによつて満足する事となり、慾望としては多少變化して所謂美慾と云ふものになるのであります。つまり眼と耳とによつて美を味ふ事になるのである。併し舌(味覚)や身體(觸覚)や鼻(嗅覚)によつて美が味へない譯ではない。唯主として眼と耳とによるといふ事になるのである。

眼と耳の趣味

美が主として眼と耳とによつて味へるといふ事から、眼と耳とで味ふ感覺、即ち視覚と聴覚とを美的感覺と名づけ、感覺中の高等なものとする事が普通であります。而して舌や、鼻や、皮膚で味ふ感覺、即ち味覚、嗅覺、觸覺を下等なものとするのであります。此の高等、下等の區別は、標準次第でどうでもなる事ではありますが、視覚と聴覚が最も美術と縁が深い——視覚を主として繪畫が成立し、聴覚を主として音樂が成立つ——事を思ふと、視聽二覺を高等とする事も美的感覺を標準としては當然であります。勿論味覚や嗅覺や觸覺も、美術と縁の無い事はないのですが、

視聽二覺ほど縁が深くないといふ事は拒めないと思ひます。

又進歩の順序を見ても、味覺の食慾から、視聽二覺の美慾に發達して來たのですから、後者が前者よりも高等の事は許さなければなりません。これが即ち趣味の進歩で、舌の趣味が、眼と耳との趣味に發達したのであります。而して今日では眼と耳とで味ふのを趣味とし、舌で味ふのは趣味でない、少くとも下等の趣味とする様になつたのであります。併しとにかく起源ではありますし、舌の趣味を趣味でないと貶すのは酷だと思ひます。百姓から大臣まで出世したとて、百姓を顧みないのが酷であると同時に、兩者同等に見る事も、亦出來ないと同様であります。例へば繪の趣味と酒の趣味とは、其の發達の程度に於いてこそ大なる逕庭がありますが、趣味たるに於いては等しいとせねばならぬのであります。

趣味の洗練

それで繪や彫刻や其他美術に對する趣味が、最も進歩した趣味である事は解つた

らうと思ひますが、繪の内でも又趣味に種々の相違がある。即ち種類についての差と高下の差とであります。例へば西洋畫に趣味を持つ人もあれば、日本畫に趣味を持つ人もある。西洋畫の内でもアカデミックなものに趣味を持つ人と、新しい畫風なもの、日本畫でも南畫と四條圓山と今日の新しい派といふやうな區別がある。これは必ずしも何れを優り何れを劣つた趣味と云ふ事は出来ないが、同じアカデミックなものでも、干乾ばしの靜物を描いたので満足する様な趣味もあれば、幽艶な美人を描いたのを喜ぶ趣味もあります。而して此の場合は前者の趣味より後者の趣味が優つたと云はねばならぬ。又新しい畫風の繪としても、無暗と強い色を生なまで使つてゐるものをよいとする趣味もあれば、強い色でありながら全體として調和したものを好む趣味もあり、これも後者が前者に優るとしなればなりません。又少し違つたもので云ふと、着物の例で、縮緬でさへあれば柄はどうでもよいといふ趣味、木綿でも柄のいゝ方がよいと云ふ趣味、裝身具の例へで、新ダイヤでも大きい方が

よいといふ趣味、小さくても眞物のダイヤでなければと云ふ趣味、さまざまの趣味がありますが、何れも前者より後者の方が優つてゐる事は明かである。これらは趣味の洗練ソライといふことで、始め下劣な趣味を持つ人も、教育によつて漸次洗練し優等の趣味に進歩する事が出来るのであります。而して舌で味ふ味覺の趣味から、眼耳で味ふ視聽覺の趣味となり、根本に於いて食慾が美慾と化し、視聽覺が洗練されて、茲に始めて、立派な趣味が出来るのであります。尤も「味ふ」といふ事は終始一貫し、唯「味ふ」器管が舌から眼と耳とに變り、「味ふ」ものが味から色、形、音に變り、「味ひ」方が洗練される丈けであります。

興味との區別

趣味といふは「味ふ」のが主である、これが藥になるか毒になるかは別問題であります。起源的に舌で味ふ場合には、唯味へばよいので、それが衛生上どうあつてもそんな事は趣味と没交渉である。進んで眼で味ふ場合となつても、繪なら繪を、唯

眼で味へばよいので、其の繪が賣物であらうと、博物館のものであらうと味ひに違ひのあらう筈がない。若し買ひたいとか、買つても損はないと云ふやうな考へが起れば、もはや味ふのでない、即ち價格とか金錢とかいふ考へと趣味とは別問題である。換言すれば「味ふ」事だけで趣味の目的を達し、それ以上に趣味の目的はないのであります。ですから碁とか商業とか云ふものに趣味を持つといふのは、碁に勝負と云ふことが離れられない限り、商業に利害といふことが離れられない限り、碁も商業も趣味とは云へない。然らば何かと云ふに、これは興味(Interest)である。かの「碁に趣味を持ち始めた」とか、「商業に趣味を持つ」といふのは、趣味といふ言葉の轉用に非ずして誤用である、これらの場合は興味と云ふ字を使ふべきであります。繪にしても此繪を買つても損はないと思ふ場合は、明かに利害の上から繪を見てゐるので、趣味に非ずして興味であります。

少し違つた方面で例を挙げますと、衣服でも單に趣味の上からならば、即ち眼で味ふ丈けならば他人が着て居ても、三越に飾つてあつても、自分が着てゐても同様でなければなりません。是非自分の所有とし、自宅の箆笥に仕舞つてなければいけないといふのは、所有するといふ興味に過ぎない。これらは舌の趣味として、酒を味ふといふ事などは全く別の事で、どうしても趣味といふ言葉が用ひられない譯であります。何んでも物を蓄めるといふ事は興味であつて趣味でない、たとひそれが美術品であつても、蓄める事自身は興味の爲めである。趣味と蓄める事自身とは沒交渉である。蓄める方から云へば、珍らしいものを多く蓄ればいゝのであります。が、趣味の方からでは、唯珍らしくてもいけない、多くあつても仕方がない。趣味深きものが一つでもいゝ、又それが誰のものであつてもかまわないのであります。若し自分のものになくはつまらない事になれば、展覽會を見に丈けゆく人は無くならなければならぬ筈ではありませんか。趣味の世界は、利害とか金錢とかいふものを離れた無邪氣な世界であります。彼の社會主義者の理想は、趣味の世界に

於いてこそ完全に實現されると思ひます。ウィリアム・モリスが「趣味的社會主義」を唱へたのは、大なる卓見であつて、我々の感服し賛同する所であります。

趣味の要素

「趣味といふ意味」は以上では解つたらうと思ひますが、更らに少しく心理學的に、若しくは美學的に簡單に説明して置かうと思ひます。趣味は「味ふ」といふ事が主であると云ひましたが、起源の舌で味ふ事から、眼や耳で味ふに至るまで、感覺ばかりでなく、感情を伴つて來る。又感情にも止まらず判断に及ぶ。例へば繪を見る、眼で色や形を感ずると同時に、美しい、氣持がいゝといふ感情が起り、續いて朝の景色であると判断し、つひに繪としても價値を判断するやうになる。即ち難しく云ふと、趣味の要素は、第一に觀察する事、第二に感ずる事、第三に判断する事アンシャウエン、ヒエーレン、ワルタイルンであります。而してこの三者は大體第一第二第三の順序で行はれるものであるが、其の時間の極めて短い場合が多く、彼之混在する場合も少くない。觀察すると同時

に感じ、感ずると同時に判断してゐる事が少くないのであります。併し普通の人は大抵感情まで行つて多くの時を費やし、専門家は早く判断に進む傾向があります。

觀察と感情と判断とは、趣味の三大要素で、それが更らに細に分れます。まづ觀察は、眼の方と耳の方とに分れ、眼の方でも色と形とがある。耳の方でも諧調の側と拍子の側とがある。又感情にも自分を主として、繪なら繪に對して嘆美する感情と、繪の中の感情（憂に沈みたる少女を描いた繪ならばその少女の憂）を自分に感ずる感情（所謂感情移入）もあります。かく種々なるものが複雑して働くのですから趣味といふものはさう簡單に云へない譯であります。殊にそれが各人各個で、進歩の程度も違ひ、組合せも違ふので、従つて趣味も違つて來る。人各々一個の趣味を持つ」とか「趣味について争ふ能はず」とか云ふ諺のあるのも無理のない事である。猶趣味の美學的解釋は拙著『美學及藝術學概論』に詳述してあるのを参照せられたい。

趣味の教育

趣味が、舌の趣味から眼や耳の趣味に進歩、發達すること、又眼や耳の趣味の内にも種類の差と高下の差のある事などは前に述べました。種類の差は、前に繪畫の例を挙げましたが、音樂でも、日本音樂に趣味を持つ人もありますし、西洋音樂に趣味を持つ人ある。日本音樂の内でも、長唄と清元と歌澤と浪花節と、夫々趣味が違ふ。而してそれらは種類としても高下がないではない、又洗練の度合の差もありますが、それよりも、同じ種類の内での高下の差の方が甚だしいのであります。

趣味の教育といふと、廣い意味を含んで居つて、先づ第一に、舌の趣味（舌の趣味も亦洗練せしむる必要があります）から、眼と耳との趣味に進歩、發達せしむる事、第二に眼と耳との趣味の内でも、種類に於いて高等なものを選択せしむる事、第三に同種類の内で高等なものに向はしむる事等である。

以上は對象の方から云つた話であるが、之れを人の方から見ると、先づ我々の眼

や耳の感覺を洗練せねばなりません。美しい色や形を見ても、妙なる音樂を聴いても、それが解らなければ何にもならぬ。これが解るやうに、解る程度が高くなるやうにするのが趣味の教育であります。

一般に教育といふものは、生れてから死ぬ迄續くべきものであります。趣味の教育は、殊に人の一生を貫くのみならず、生れる前の胎内は勿論、父母祖父母までも廻るべきものである。即ち趣味の教育は遺傳に關し、遺傳が重せられてゐる。よい遺傳を持つて生れた上に、よい教育を施し、始めて眞に理想的に、趣味が進歩發達するのであります。趣味教育については、別に項を改めて詳述して置いたからこれだけに止める。（大正、五、一、趣味之友）

〇長壽と趣味

長壽と趣味、一見縁の遠いやうな二つの事の大なる關係のある事は、醫學博

士入澤達吉氏によつて説かれました。先づ博士の言を引いてみませう、曰はく——
老人の衛生と云ふことに就て、私の特に云はんとする點は、趣味の養成と云ふこと、もう少し俗な語で云ふと、道樂といふことである、人間が銘々何か一つの道樂を持つのは、その健康上、衛生上に最も大切なことである。非常に繁劇な最中も僅かに時間を偷んで、自分の道樂に想ひを行ると、勞れた精神に受け入れる愉快も多く、従つて身體の健康にも有益である。殊に老年に達してからは、趣味に活き、趣味に若やくといふ事が最も必要なことである。就中其人が一旦職を罷めた場合には其の道樂に因つて精神の安逸に流れんとするのを防ぐことが出る。道樂によつて精神に絶えず刺戟を與へる事は、萎えんとする植木に水を灌ぐやうなものである。扱て其の道樂には何が宜いかといふに、書畫、骨董、圍碁、將棋、音樂、詩歌、俳諧、讀書、盆栽、園藝、漁獵等、其の好む處に任せて差支ないが、總て是等の事は一時的の努力に因つて急に獲んとしても獲らるゝものではないので、永い歲月の間

に自然に養成されたものでなければならぬ。夫故に世間の例に就て觀るに、壯年時代から職業の外、他を顧みなかつたと云ふが如き勤勉家は、老後急に閑日月を得ると、忽ち身體の調節を喪つて仕舞ふ。と云つて今日職を罷めたから、明日から道樂を始めやうとしても爲し能ふものではないのであるから、此邊は豫め考へて老後に處する道を、壯年時代から扶殖して置く事を、私は切に、壯年者に向つて勸告したのである。是れ則ち長壽法の最も緊要なる一條件である。(一月二日三日の時事新報掲載)
種々な長壽法もあると思ひますが、其の主な一つとして、入澤博士が趣味を力説された事は、博士が醫學の大家であるだけに甚だ面白い。この博士の説は此の上私
が何も附加する必要のない程うまく述べられてゐると思ふ。

晝間非常に繁劇な事務に、頭も體も使つてゐる人が、朝夕の僅かな暇に庭の植木を見るときか、盆栽盆栽の水をやるとかいふのは、どれ丈け其の人の活動を助け、勞苦を慰するか知れませぬ。或は又夜になつて文學的の作物を讀むとか、寄席に行くとか

いふ事も同じ効能があります。或はそれだけの暇もない人は單に晩食をする間にも又晩酌をやる間、趣味ある器に、凝つた料理を盛つて、家族と共にするやうにすれば、其の二十分なり、三十分なりの間に云ふべからざる趣味が味へる事と信じます。而して入澤博士の云はれた通り、年老いて一旦劇職を離れた場合に、趣味のない人は、暇で／＼致方がないものです。この實例は随分多く見受けられますが、この時に、前から持つてゐる趣味の方に時間を充てれば、暇に苦しむ事もなく、益々其の趣味を高めて、眞に愉快に、老後を暮し、長壽を保つ事が出来るのである。入澤博士の説は全く吾人の意を得たもので、吾人の云はんとする所を述べられてありますから、同感の餘り、其の一節を引いて、茲に讀者に紹介することとしたのであります。(大正五、二、趣味之友)

貧乏と趣味

趣味が長壽の一要件であるといふ事は、前項に入澤博士の説を引いて述べましたが、趣味は又貧乏に堪へる一要件であります。勿論趣味の内には、非常に高價な趣味があつて、貧乏人ではとても味へない趣味もないではない、例へば住宅の趣味の如き、服飾の趣味の如き、或る點ではどうしても莫大な富を積み、巨額の金をかけねば味へない趣味もあります。併し多くの趣味は莫大な富を要しない、至極安價で済ます事が出来る。恐らくこれ程安價なものはあるまいと思へる位である。我々は金五錢を投すれば博物館に入つて數萬金を値する古書を味ふ事が出来ます。たとへば高野山の彌陀二十五菩薩來迎圖の如き、如何なる貧乏人も五錢を投すれば、表慶館で見る事が出来ると共に、たとへば百萬の富豪と雖も矢張同じく表慶館へ行かねば味へない。かの傑作に對するとき、懷中に百圓札を持つ富豪も、懷中に下足札のみ

を持つ貧乏人も同じ心で、同じ美を味つてゐる、其の間に何の差別もない。これが趣味の面白い所で、趣味といふものは、富豪も貧乏人も、一視同仁、全く一種の社會主義を實現させるものであります。

博物館はまだ五錢要りますが、全く一文も要らないものがある。自然が即ちそれで、美しい月の光は、誰でも唯の一厘も費はすに見る事が出来る。又いくら金を積んでも、月を遮る雲を拂ふ事は出来ない、しかも一旦雲から出たときは、富豪にも乞食にも一樣に其の光を放げかけます。その他、雪の旦、西山の落日、或は又、野の花、林の鳥、それらの美しい色と形と聲とは、皆貧乏人の上にも與へられるのである。

又比較的高價を要する住宅、服飾の如きも、必ずしも金の額と正比例して趣味が味へるとは云へません。徒らに節無しの桎材を使った室より、却つて節ありの方が面白い事もある、銅などで葺いた屋根よりは藁葺の方が遙かに趣は深いものであり

ます。又貳拾圓以上の御召よりも四五圓の銘仙の方が、遙に優れてゐる事もあり、随分木綿でも、何とも云へないよい柄のある事があります。これが皆趣味の御蔭で趣味に生きる人は、平氣で銘仙を着て、御召を着てゐる人を嗤つてゐる事が出来るのであります。私などはネクタイを買ふ場合に、殆んど値に關係しません、勿論貳圓より高いのはあまり手も出しませんが、それより以下なら、全然趣味本意で、壹圓五拾錢であらうと七拾錢であらうと、氣に入つた面白いのを買ひます。そして七拾錢のをしてゐても、高くて嫌なのをしてゐる人を却つて嗤ひたくなり、又何でも高くないては駄目だと思つてゐる人を憐みたくなりました。

斯う考へると、趣味は貧乏人の敵でなくて味方であり、趣味が貧乏に堪へる一要件である事は確であります。即ち趣味によつて生きれば、貧乏でも満足する事が出来、又長壽もする事が出来るのです。何んと趣味の効能、功德は偉大ではありませんか。我我は神や佛はさて置き、其の次に最も大なる効能を與へるものは、趣味で

ある事を信じて疑ひません。(大正五、二、趣味之友)

意氣と上品

意氣の反対は野暮で、上品の反対は下品であります。誰れしも意氣でありながら上品でありたいと思ひますが、意氣だとやゝもすれば下品となり、上品だと稍もすれば野暮になりたがります。即ち意氣には下品が、上品には野暮が結びつき易いので難かしいのであります。

一口に山の手の夫人や令嬢は上品であり、下町のお神さんや娘は意氣であると云ひますが、さて意氣にしても、上品にしても、之れを言葉で説明する事は中々困難であります。二三の例で云つて見ますと、第一に線が水平、又は垂直だと上品になり斜だと意氣になります。例へば首を真直にしてゐると上品ですが、少し曲げると意氣になります。(寫眞を撮る場合などによくわかる)。體も真直にしてゐると上品です

が、斜にすれば意氣になります。(俥に乗つた場合などよくわかる)。又帯止めを水平にしめると上品ですが、斜に締めると意氣になります。第二、線が集合したものになると、直線が意氣で、曲線が上品の場合が多い。例へば縞ものの方が模様ものより意氣であります。シヨールとかコートなどにしてみますと、立縞の方が意氣で、模様の方が上品に見えます。第三に色でありますが、これは單に一つの色で云ふことが難かしく、二つ以上の色の集まつた場合、即ち配色の上で云へる事が多い。たとへば黒と緋とを例にとつてみても、黒は紋付の場合、緋は袴の場合上品であります。黒縮緬の羽織は比較的意氣であり、黒襟などは意氣なものです。緋も緋鹿子の帯上げなど、其他濫い色の内に一寸緋を使ふと意氣になります。

斯う云つて來ると、意氣と上品とは、殆んど正反對の事で、とても兩者を兼ねる事は困難の様に見えますが、さうでもありません。

意氣と上品といふ外に、地味、濫味といふやうな事がありますが、この地味とか

滋味とかいふ事が、意氣と上品とを、結合させるに都合の好いものだらうと思ひます。地味の反對の派手、滋味の反對の甘味、さういふものは、意氣と反對し、又上品とも反對してゐます。まづ一般に藝妓の服装を意氣とし、山の手の奥様のそれを上品としますと、女優のは意氣でも上品でもなく、甘くて派手なものと云はねばなりません。地味とか滋味といふ事は、女優からは見出す事の出来ないのが普通です。ですから、意氣で上品であるには、女優は全く反對の位置にあつて、極めて縁遠いものと云はねばなりません。まづ奥様が藝妓を基として、兩者に共通な、地味、滋味といふ所から、奥様が意氣をとり入れ、藝妓が上品をとり入れ、ば始めて意氣と上品とを兼ねることが出来ると思ひます。實際奥様で、上品でありながら意氣な風な人を見受ける事が時々あります。さう云ふ人に限つて地味であり、上品を失はずに意氣に見えるのであります。又藝妓にしても随分上品で、どこの奥様かと思ひます。やうな場合がありますが、それも必ず地味と滋味とが土臺になつてゐます。

以上は多く服装装身具について云つたのですが、生れつきの顔にも意氣と野暮、上品と下品、地味と派手、滋味と甘味とがあります。まづ輪廓から云ふと、圓い顔はどうしても、派手で甘味があり、少し長くなつて始めて意氣か上品の顔になります。茲でも意氣と上品とは縁がある。唯その少し長い顔を眞直にしてゐると上品なので、一寸斜にすると意氣になるのであります。それから化粧の仕方にも無論意氣と上品と色々ありますが、一口に云ふと意氣にも上品にも薄化粧が必要で、茲にも亦一致點を見出すのであります。濃い化粧は、派手であり甘味があり、野暮になり下品になります。

次には髪形の形ですが、これにも無論意氣も上品も種々あつて、一々云ふと長くなりますからよしますが、一寸云つて見ますと、同じ島田でも、高島田は上品で、つぶし島田は意氣ですし、丸髻も根の上つたのは上品で、下つたのは意氣になるといふのは、線の垂直と斜との關係が茲にも現はれたものと見て差支ないかと思ひます。

意氣と上品と云ふ事については、一々實例について云へば中々書くことは盡きませんが、又男子の服装其他にも無論あるのですが、今回はこれだけとし、讀者諸君が夫々御自身で、氣を付けて見られたら、いろいろ面白いことがあるだらうと思ひます。(大正五、二、趣味之友)

立太子禮と趣味の發現

今上陛下の第一皇子迪宮裕仁親王殿下は十一月三日を以つて立太子の禮を擧げさせられる事となつた。昨秋御即位の大禮を擧げさせられ、今秋又立太子の禮があるといふのは重ね々御目出度い事で、我が皇統の連綿として彌榮えます事を示し、萬民共に喜ぶべき至である。

所で趣味といふことは何事にも纏ふものであるが、殊に喜び事祝ひ事などに附隨して新しく現はれるのもである。昨秋の御大典に際しては、東京京都の街頭裝飾を始

め服飾の御大典模様から、陶磁器に至るまで、趣味の發現は著しきものがあつた。今回の立太子禮には昨年の御大禮ほど色々の催しもないであらうが、それでも色々な事があるやうである。其の主なる一つとして馬場先門に奉祝門が建てられるといふ事で、既に其の設計圖も新聞で見たが、これは御大典の際の萬歳門の如く、最も多くの人の眼を惹くものであるから、最も趣味の發現でありたいと思ふ。萬歳門は大體日本風で、燈火設備などに新しい事もあつたが、大體の格好はあまり感服しかねるものであつた。今回の出来た上でなくてはわからないが、設計圖では萬歳門に優るものらしく見えた。この奉祝門を發起點として京橋日本橋其他滿都の市街が裝飾される事と思ふが、これは御大典の際には、各町各様で、一町としては夫々工夫を回らし面白いものもあつたが、全體としては頗る不統一な、且つ不面目なものであつた。今回は是非大體を統一して、あの不面目を繰返さないやうにして貰ひたい。

街頭装飾の次に目につくのは、商店の飾窓の奉祝装飾である。飾窓の装飾は、近時非常な勢ひで進歩して来て、専門の雑誌まで出てゐるが、立太子禮については、必ず奉祝の意味を以つて新しく装飾される事であらう。御大典の際は、清楚な意匠で佳いと思つたものが銀座通りなどに相當にあつたやうに記憶するが、今回は一層進歩した意匠が見せて貰ひたいものである。

服飾品には今回はあまり現はれないかもしれないが、兒童用の品や玩具などには相當に現はれるやうである。未だ特に感服したのも見當らないやうであるが、兒童趣味養成の上から、それらの意匠には注意して貰ひたいし、保護者も選擇に意を須ひて欲しいものである。

花の日の會も立太子式の當日に行はれるといふ事である。これは去秋御大典に際して始めて行はれ、好成绩を得たのであるが、趣味の發現として最も面白い催であると思ふ。花の製作、賣り方、利用の仕方など改良の餘地もあるかもしれないが、

年に二度位は行つてもいいと思ふ。

嘗て、明治天皇の崩御になつた時、十一月三日の天長節がなくなるのを遺憾に思つて、菊花節として之れを保存し、四月三日を櫻花節とし、年に二回花に因んだ祭日を作りたいと、當時余の關係してゐた「讀賣新聞」紙上で述べたことがあつた。今年その十一月三日に立太子式を行はれるは、矢張先帝を偲ばせられる所からであらうが、其の日に花の會を行ふのは、最も意味ある事と思ふ。櫻花節も神武天皇祭日に櫻の花で花の日の會を催したならば、結構な事だと思ふ。櫻花は大和魂を表象し菊花は我が皇室の御紋章で、共に國花とも云ふべき花であるから、其の二つの花祭を四月三日と十一月三日に行つたならば、神武天皇と明治天皇とを記念し奉るにしても甚だ意味ある事と信ずる。

立太子禮を擧げさせられる十一月には、所謂七五三の祝がある。これは兒童の趣味の發現として最も注意すべき事であるから一寸附記して置かう。兒童の趣味の發

現と云つても。祝着を選定するのは親であるから、實は親——大人の趣味の發現であつて、それが兒童を假りて現はれるのである。而して兒童に對しては一種の趣味教育となるのである。女の兒などは綺麗な着物を着せられて、唯嬉々として喜んでゐる丈けであるが、識らず／＼の間に、其の祝着に現はれた趣味が、それを着てゐる兒童にも、又これを見る他の兒童にも感化を及ぼすのである。ナニタカが子供の事だからと思ふ人もあるだらうが決してさうでない、兒童の趣味教育はさう云ふ事が最も肝腎なのである。言葉などで説明しても、子供の事であるからさうわからないが、實物はイヤでも子供の眼を刺戟し、其の好尚を左右する、一寸の間では其の感化もわからないが、長い間にもつりつもつて、それが其の子供の趣味の素質となり、根柢となり、大人となつた時の趣味は、それが成長したものに過ぎない事になるのである。さう考へると祝着の選定といふ事は、親に取つては重大な意味ある事で、慎重に考へねばならぬ。而してそこには親の趣味が役立つので、趣味の教育と

いふ事の、大きな範圍に涉る事がわかるのである。(大正五、一一、趣味之友)

○「單純」の趣味

趣味の法則の説明として、先づ第一に述べてみたいのは、「單純」(Simplicity)といふ事である。「單純」とは讀んで字の如くで、別に説明する必要もあるまい、くだけ／＼と説明すれば即ち「單純」でなくなるのである。併しそんな「單純」な事が、實際に當つては中々行はれないので、そこが説明を要する所以である。

まづ順序として何故「單純」に趣味があるか、何故「單純」が美しいかと云ふ事を考へてみるのに、それは神経をあまり使はずにあつさりスラ／＼と頭に入るからである。複雑だと、餘計な神経を使ふので、スラ／＼と行かない、複雑でも其の内に又何か別の法則が在る場合、一口に云へば「複雑の内の單純」「複雑の内の單純」といふ事は、趣味の原則であつて、それから種々の法則が生ずる)ならば、比較的

スラ／＼行くが、唯無暗に複雑なのは、神経を使ふばかりであつて、それでは趣味もなければ、美しくもない。勿論複雑でも、特にこれに對する準備をした者からみれば、その複雑がスラ／＼と行かない譯もないが、それは特別の場合で、普通は單純の方がスラ／＼と早く頭に入る、従つて快いといふ事になるのである。以下少しく實例によつて、「單純」の趣味を説明してみやう。

○ 自然 界

先づ自然界でみると、日本で最も美しい山と云はれてゐる富士山の美しさ（遠望の場合）は、其の形が「單純」な爲めである。山としてあの位「單純」な形の山はない。又色から云つても夏は唯薄黒く、冬は眞白で、頗る「單純」である。大洋の美なども、見る目たゞ海ばかりの「單純」な所に其の趣味がある。満目荒涼の大原野或は沙漠に美があれば、「單純」の爲めである。雪景色は、白色の單純化が美を作るのである。松なら松ばかり、竹なら竹ばかり、麥なら麥ばかりと云つた様な松林、

竹林、麥畑の美も「單純」の美である。又唯一輪の花、一本の木が廣い所にあるのも「單純」の美である。色々の花を集めた盛花（さかひな）よりも、一輪生の一輪の花の方が美しい場合があるのは、その好例である。八重の花も美しいが一重の花も美しい、一重の美は「單純」から來るのである。又墨堤十里花の雲と云つたやうな、櫻花ばかり一團となつた美しさも「單純」の美である。汽車のレールが長く續いて見えるのも一種の美しさがあるが、夫は矢張「單純」の美である。

人でも動物でも、澤山同じやうに集まつた美しさは「單純」の爲めである。足並揃へた兵士、女學生、何れも同じ制服、同じ袴が集まつた「單純」の美である。思ひ／＼の服をつけた群衆には、決して「單純」の美は見られない。白い鳩や鷗が群れた美しさも「單純」から生ずるのである。

○ 美 術

美術になると、第一に建築がさうである。我が國の古い伽藍の堂塔の美しさは、

一つは「單純」な爲めである。平面から云つても、矩形か方形かで、屋根の形も四注とか寶形造の極く「單純」で、却つてそこに限りなき趣味がある。素木造の美も、丹塗の美も、共に「單純」の賜である。大體の形に於いても「單純」は、多くの場合勝を占めるが、細部に於いては、殊に「單純」が最後の勝利を占める。餘計な凹凸は却つて美しさを失はしめる場合が多い。建築の裝飾も細部と同様、「單純」が最上の方法である。室内裝飾など、「單純」が最も無難である。額にしても置物にしても、多過ぎるよりは少な過ぎる方がいゝ。遠棚などは、いゝものを一つ載せたのが最も「單純」で、奥床しいものである。

彫刻でも同じであるが、彫刻は多くの場合「單純」なものの許りであるから特に云ふ必要は認めない。近頃着色をする事が流行するが、それも一色ならば「單純」を失はないからいゝけれども、種々な色を使つたものは多くの場合失敗する。

繪畫では、水墨畫が最も「單純」の美を發揮し、殊に文人畫には、「單純」の趣味を

最もよく示したものが多し。所謂略筆は、「單純」化をなさんが爲めに行はれるので、東洋畫の理想の一つは、實に「單純」化に在るのである。西洋畫にしても、「單純」は決して悪くない、澤山の人物などを描くよりは、一人を描いた方が優る場合多く、裸體畫は一種の「單純」な美を現はさんとしたものと見る事が出来る。

○ 工藝品と裝飾

工藝美術品に就いては、最も「單純」を叫びたい。工藝美術の墮落は、多くの場合複雑から生ずるのである。今日吾人が古代の工藝美術品に感嘆するのは、其の「單純」な點が主である。附けなくてもいゝ凹凸を附し、附けなくてもいゝ模様を附けるのが、今日の頭の悪い工藝美術家のやる事である。或は複雑にし得る程頭が進んだのだと云ふ人があるかもしれないが、それは手先の小器用に過ぎない。下らぬ凹凸や餘計な模様を附けるやうな頭は、確かに退歩してゐるのである。無地の青磁や白磁の趣味は、「單純」の値をよく示してゐるではないか。

工藝美術に附随して、裝飾や、裝飾に用ふる模様なども、「單純」が一番間違ひの道である。而して單純の極端として、無裝飾といふ事が最上の効果を收める場合がある。青銅の一輪生など、形が面白い所へ、蛙を一匹つけた爲めに却つて悪くなる場合がある。蛙などの裝飾物をつけない方が、すつといふのである。關西などに行くと、障子に箆めたガラスに磨り模様をつけたのがあるが、あれなども、無地の方がすつといふ。無色透明の方が、裝飾を附けるよりも美なのである。

○ 服飾と化粧

服飾も亦工藝美術と同様に切言したいものがある。先づ服飾として白無垢、黒紋付、緋の長襦袢などは「單純」の美によつて説明さるべきものである。又小にしては黒縹子の帯、無地の半襟なども「單純」の趣味である。而して服飾の趣味としては、「單純」が最も間違ひのない事は勿論、進んで上乘であると云ひたい。無地々と云つては極端であるが、縞にしても模様にしても、服飾品を選ぶ際に、「單純」は決して

忘るべからざる標準である。「單純」に過ぎるのは、複雑に過ぎるより數等ましである。「單純」に過ぎたのは淋しい丈けであるが、複雑に過ぎたのは賑かだけでは濟まない、唾棄したくなるものである。前者は淋しいながらに人を惹きつけるが、後者は人に嫌惡の情を催さしむる。

服飾に關して、化粧、装身についても「單純」を奨めたい。束髪には唯一つのピンで足りる、指輪も「單純」なものが二つもあれば結構である。薄化粧に洗ひ髪の美しさは、「單純」から來るのである。所謂婦人美の生彩を發揮するには「單純」の法則を遵法せねばならぬ。

「單純」の趣味は以上では、わかつた事と思ふが、然らば「單純」の美は、如何なる種類の美を生ずるかと云ふと、「清楚」、「淡泊」、「瀟洒」等は當然であり、場合によつては「崇高」、「上品」、「意氣」などの趣味となることもある。形の「單純」が大きいものである場合は「崇高」となる。白の羽二重の襟は「清楚」であつて「上品」であるが、

新橋色の無地の襟は「意氣」である。又裝飾の少ない茶室などには「瀟洒」「淡泊」の趣味がある。例はいくらでもあるが、考へれば考へる程「單純」の趣味の廣大な事がわかるのである。(大正六、三、趣味之友)

「繰返し」の趣味

前項に「單純」の趣味を述べたが、單純から一步複雑に踏み出すと、其處に色々な趣味の法則がある。併し複雑となつて色々な法則があつても、其の原則は一つであつて、其の原則に従つて、色々な法則が割出されるのである。原則と云ふのは、前にも一寸述べた「複雑の内の統一」(Unity in multiplicity)といふ事である。複雑なものが、何かの點で統一してあればいゝのである。

友禪の美しい模様には随分複雑したものもあるが、どうしてそれが美しいかと云ふのに、複雑してゐる中に、或は同じ模様が「繰返され」(repeat)てゐるとか、地

色が一定してゐるとか、統一してゐる點がある。例へば櫻の花に水をあしらつた模様とすれば、櫻の花は少くとも模様の多くを占めてゐるので、其の散らし方は自由であつても、花の形は大體一定してゐて、「繰返され」てゐる。又水にしても同じやうな曲線が平行して現はされてゐれば、即ち「繰返し」(Repetition)である。色の方からみても地色が一定してゐるとか、櫻の花の色が同じであるとか、水の色が同じであるとかいふやうになつてゐる。

今述べたのは、複雑の中の統一をつける法則として、主として「繰返し」といふ事であるが、其の他に調和とか釣合とか、漸層とか、對稱とかいふのも皆複雑の中に統一をつける法則である。

形と色の「繰返し」

「繰返し」の最も眼につくのは、形の上の繰返しである。自然にしても藝術にしても随分複雑してゐるやうに見えるが、形の上で全然「繰返し」のないものは恐らく有

るまいと思ふ。木一本をとつてみても、まづ幹があつて、其れから出てゐる枝は既に「繰返し」である。葉や花に至つても無数の「繰返し」をなしてゐる。

藝術の中では、建築に非常に「繰返し」の分子が多い。柱が並んでゐるなどは、極めて著しい繰返しであるが、窓が並んでゐるのなども其の一例である。その他細部になると、無数の「繰返し」がある。殊に其の裝飾には「繰返し」のないものは無い位である。建築裝飾に限らず一般に裝飾には「繰返し」が多く用ひられてゐる。

彫刻と繪畫とは、「繰返し」は比較的少いが、彫刻でも群像の場合、若しくは多少裝飾的意味の加はる場合には「繰返し」が用ひられる。繪畫も大きな畫面になると、大抵「繰返し」があり、裝飾畫となると、「繰返し」が頗る多くなつて来る。工藝品にも亦「繰返し」は多い。殊に工藝品で数の多いもの、例へば卓とか椅子とか、又膳とか茶碗とかいふやうなものは必ず「繰返し」が行はれてゐる。

服飾に於いても可なり「繰返し」は行はれてゐる。衣服の模様、縞柄に於いても、

装身具に於いても其の例は多い。時計の鎖などは「繰返し」の最もいい例で、鎖の一つ一つは全く同一のものである。

以上は主として形の上の話であるが、色に於いても可なり行はれてゐる。それは形が「繰返し」してゐる場合には、色も大抵はそれに伴つて繰返されてゐるのですぐわかる。自然に於いても藝術に於いても、服飾等に於いてもすべてさうである。

音と運動の「繰返し」

音の上の「繰返し」も亦少くない。所謂曲と名のつくものは、必ず幾つかの「繰返し」で成り立つてゐる。小さな繰返しもあれば、大きな繰返しもあらうが、とにかく繰返されてゐる事は確である。單純な唱歌などでも、短い内に「繰返し」が行はれてゐる。以上は所謂音樂の方の話であるが、自然の音には殊に「繰返し」が多い、鳥や蟲の聲、松風の音、雨の音、皆「繰返し」である。

運動の上にも亦「繰返し」が多い。第一我々の歩行といふ事が「繰返し」の基である

が、所謂舞踏、舞踊といふものには、必ず「繰返し」が伴つてゐて、西洋のダンスには殊に多いやうであるが、日本の舞にも少くはない。

「繰返し」の趣味の理由

以上述べた様に「繰返し」といふ事は、自然にも藝術にも多く含まれてゐるが、何故それに趣味があり、我々に快感を與へ美感を與へるかといふのに、これには生理的根據があるやうに思はれる。それは人間の呼吸と脈搏とである。呼吸も脈搏も共に、絶えず「繰返し」をやつてゐるものである。人が生れて、最初の呼吸をなし最初の脈搏が始まる時から死ぬまで、その「繰返し」は絶えない、つまり人の生活は「繰返し」の生活である。又一方では地球の自轉によつて、晝夜が分れ、これが毎日「繰返し」てゐる。それに従つて人も亦朝起きて夜眠るといふ「繰返し」をやつてゐるので、この點からも人の生活は「繰返し」である。かく我々の生活が「繰返し」を基礎としてゐるのであるから、我々が、「繰返し」に對して共鳴するのは當然であつて、特

に快を感じ、美を感じるのも不思議はないのである。

併し「繰返し」が快感を與へる理由はそればかりでない。平地の上へ水を流すと、始めは流れ難いが、一度流れてあとがつくと、次に流す時は流れやすい。人の腦、神經も同様で、始めては通りが悪いが、始めての刺戟が通るとあとが出来、次に同じ刺戟がくると、前のあとを通るから樂である。この樂に通るのが、快感となるのである。音樂をきく場合には、誰でも感ずる事であるが、自分の一度聽いた曲ならばそれだけ餘計に快い、初めての曲でも、其の中に繰返しがある時は快い。これは形でも色でも同様である。「繰返し」といふ事が快感を與へるのは、實にかゝる理由に基くのである。而してそれが「複雑の中の統一」の一つの場合である事は云ふまでもない。(大正六、五、趣味之友)

「調和」と「釣合」の趣味

複雑のものが統一する一つの方法として、前項に「繰返し」といふ事を述べたが、茲には矢張其の方法として、「調和」(Harmony)と「釣合」(Balance)とについて述べやうと思ふ。

音の「調和」

「調和」といふ言葉は、種々の場合に使はれてゐるが、其のものは音から來てゐるのである。音は物の振動から起るのであるが、其の振動数によつて高低が生じ、所謂音階が出来る。音階にも種類はあるが、西洋の音階で今日我が國でも普通用ひられてゐるものは、七つに分かれてゐる。而して始めのドの音から次のドの音までを一オクターヴと云ひ、其の二つの音を同時に發すると、全く一つの音に和してゐる。これが調和である。猶その上下のオクターヴでも矢張調和が出来る。さうして

音が調和すると、耳に非常な快感を興へるものである。

此の音の調和から轉じて色についても調和があり、其の他何にでも調和といふ語を及ぼし、調和がいゝとか悪いとか云ふのである。併し普通調和がいゝとか悪いとか云ふ場合には、相應するといふやうな意味の場合が多い。

色の「調和」

太陽光線を分析するとスペクトラムを作り、その色は主として七色に分けられるが、その七色の近い色は互に調和をする。たとへば緑と青とは調和する。又同じ色の濃淡も調和する、たとへば紅と淡紅とは調和する。尤もこの濃淡を幾層にも重ねて用ふる場合は、特に之れを「漸層」(Gradation)と云ひ、單に二つの濃淡よりも一層賑やかに美しいものである。

色の調和は、建築にも繪畫にも工藝美術にも利用される。たとへば紺地や納戸地に藍で柄を現はした中形などは、色の「調和」を生命としてゐるもので、その藍に濃

淡を用いたものは、一種の「漸層」である。

形の「釣合」

色の調和に對して、形には「釣合」といふ事がある。これは元來分量上平均のとれてゐる事から起つたので、所謂提灯と釣鐘とが釣合はないといふのが夫である。併し分量から轉じて形の事が趣味に關係する。例へば二つの形が並んでゐる時、一方は細いが長く、一方は太いが短いといふ場合には釣合がとれる。法隆寺の金堂と五重塔とが並んでよく釣合つてゐるのは、その好實例である。

又一つのもので二部以上から出來てゐるものには釣合のいゝ悪いがある。例へば人體の頭と體とで、頭の大きすぎるのは「釣合」が悪い。腰から二分して、上半身と下半身の釣合といふ事も考へられる。概して西洋人はその釣合がよく、日本人は悪い。

「調和」と「釣合」の轉化

調和は主として音と色とについて云ひ、釣合は分量と形とについて云ふのであるが、それが轉化して意味、内容の上に使ふ事がある。例へば洋服と下駄とは不調和だと云ひ、和服とシルクハットとは釣合はないといふが、それは意味の上からである。又日本風の住宅に西洋館を結合するとか、夏の食膳に濃厚なものを上ぼすとかいふのも不調和である。これ等は、始めに述べた相應するとか相應しないとかがいふ意味で、俗に「うづりがい」とか悪いとかも云ふ。衣食住すべてに涉つてある事で、矢張趣味の上からは重要な事であるが、話が横路へ入るからやめて置く。

色と形の「對比」

色と形の調和に對して「對比」(Contrast)といふ事がある。調和は、成るべく近い色なり形の間に成り立つたが、對比は最も遠い色、違つた形の間に成り立つ。遠い色と云つたのは、スペクトラムを輪にした場合に云ふので、全然反對した色である。例へば赤と緑の如きは對比をなすのである。又白と黒との如きも對比を呈する。形

では圓と方形とか、直線と曲線とか、デクザクと波線とかいふやうな違つた場合に對比となるのである。

「調和」丈けでは穏やか過ぎるので、「對比」が必要となる。對比にも強いものと穏やかなものがある、けれども概して調和よりも強い。そこで積極的に美を現はすには「對比」が必要となる。緑と青との調和も悪くないが、そこに紅一點を加へると、對比をなして引しまつて來るといふが如きその例である。(大正九、五、新稿)

四季の趣味

自然は藝術の題材として重要なのみならず、趣味の對象としても輕んずべらざるものである。山川草木、鳥獸、魚貝、一つとして自然の趣味の對象たらざるものなく、又日月星辰、雨露雪霜も自然の趣味の中に含まれる。而して一年を春夏秋冬の四季に分けてみると、漠然ながらも其處に四通りの纏つた趣味が考へられる。之れを色で表はしてみると、春は淡紅、夏は深紅、秋は茶褐色、冬は灰色である。而して此の四季の自然の趣味によつて、我々の衣食住が支配され、従つて衣食住の趣味に四季の變化がある。

温帯に生れた我々は幸である。温帯に生れたからこそ四季の變化が著しく、四季で變つた趣味が味へるのである。熱帯地方の如く四時夏の氣候であつたならば、春

秋冬の趣味を味ふ事が出来ない許りでなく、夏の趣味も特に著しくは感ぜられまい。温帯の日本から行つてこそ熱帯の夏の趣味を強く感ずるのであるが、常に熱帯に居て温帯を知らなかつたならば、夏の趣味もわからない筈である。又寒帯地方は四時冬の氣候であるが、其處では春夏秋の趣味が味へないのみならず、冬の趣味も感ぜられないのである。春夏秋冬の四季の趣味を味ひ得るのは、温帯に住む我々の特權である。

しかも日本の如く、風光明媚の土地に住む我々は、四季を通じて一層自然の趣味を深く味ふ事が出来る。これから簡単に春夏秋冬の自然の趣味と、これに聯關した衣食住の趣味に就いて述べてみようと思ふ。

春の趣味

春の趣味は、色にしては淡紅であると云つたが、これは換言すれば、花の趣味で

ある。花は春のみならず夏にも盛んに咲き、秋にも咲き、冬でも咲かない事はないが、四季で云へば花は春のものである。我が國花とも云ふべき櫻が咲く丈けでも春は花の趣味の季節だと云つていゝと思ふ。其他梅、桃、椿、山吹など、春咲く花は澤山あるが、中心は櫻であつて、梅と桃とが之れに副となつてゐる。而して櫻は淡紅、梅には紅白あり、桃は所謂桃色であるが、之等をひつくるめて一口に云へば淡紅となる。之れ春の趣味を色で表はせば、淡紅だと云つた所以である。尤も淡紅の一角で表はすのは不十分であるから、之れに淺緑を加へたい。春は云ふ迄もなく、草木の芽の出る時で、其の芽の色は淺緑である。而して淡紅と淺緑と、共に濃くなるに従つて夏が近づき、眞夏となつて眞紅と深緑とになるのである。

櫻 花

春の自然の趣味、即ち花の趣味、淡紅の趣味の中心として櫻花をみるのに、櫻花の趣味は第一に其の色の淡紅の點である。胡粉の上に少量の赤を加へて暈したやう

な櫻花の色は、桃の花の艶なく又梅の如き清楚の趣はないが、其の間に云ふべからざる風情がある。殊に其の美しさは群をなしてゐる所に在る。梅の如きは、一本の古木に於いて其の特色を見る事が出来るが、櫻は千萬の群をなして、始めて其の精華を發揮する。墨堤十里花の雲の如き（近年其の趣はないが）、吉野の一目千本と云ふが如き、櫻花の趣味を發揮してゐるのである。而して其の花の壽命短く、所謂三日見ぬ間の櫻で、忽にして咲き、忽にして散る所が頗る我が國民の氣象を代表して面白い。そこで古來日本魂を櫻花にたとへ、「敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻ばな」と詠まれてゐるのである。

梅と桃

櫻を春の花の本尊とすれば、左右の脇侍は梅と桃とである。梅は白梅と紅梅とあるが、何れにしても一本の古木によつて其の趣は十分味はれる。而して櫻は満開の時に最も其の特色を發揮するが、梅は蕾の時がよく、又二三分の綻び初めた所がい

ゝ。白梅は清楚にして高士を思はしめ、紅梅は上品な美人を偲ばしめる。

桃の花は艶麗で、美しい少女にたぐへられる。その雛の節句に用ゐられ、雛壇の銀燭に映ゆるのは最も應はしい。これ桃の節句とも云はれる所以で、雛壇には櫻よりも梅よりも桃が適當するのである。桃の花は蕾よりも三四分綻びた時から満開までがよい。一本よりも林をなしてゐる方がよく、花生に挿しても、四五本以上賑やかな方がよろしい。

山吹と菜の花

櫻、梅、桃、すべて紅と白との間、即ち淡紅の趣味であるが、山吹と菜の花とは黄色の趣味である。黄色は一步轉すれば、秋の茶色の趣味であるが、冴えた黄色は、決して秋の色ではない、たゞし黄色は必ず淺緑と伴ふ事を要する。山吹も菜の花も、淺緑を背景として始めて春らしい趣味を發揮するものである。殊に菜の花は麥畑の淺緑と相待つて春の田園を美しくしてゐる。

猶春の野の花としては、たんぽぽも黄色の花の一種であり。紫雲英は、桃色の趣味である。

堇の花は紫色であるが、これも春の色である。菖蒲になると紫の分量も多くなり、初夏のものであるが、小さな堇の花は、春の淡紅の趣味を助けてゐる。

新芽——浅緑

草も木もすべて春には新芽を吹く、それが色にすれば浅緑であつて、淡紅を助けるのである。かの櫻の花の淡紅の間に、柳の芽が浅緑に萌え出でた有様は、いかに和らかな對比をなし、春の氣分を發揮するであらう。又菜の花の如き黄色は、麥畑の浅緑を背景とし、兩者の間に穏やかな調和を作つて、春の氣分を漲らすのである。麥と柳の緑は、櫻と梅と桃の淡紅に對して緑の代表的のものであるが、その他の草も木もすべて新芽は浅緑ならざるはなく、かくて春の天地は、浅緑と淡紅とに包まれるのである。

春——雨

春の色は、淡紅と浅緑とであるが、淡紅の中にも種々の程度があり、浅緑の中にもいろ／＼濃淡ある春の自然を、すべて一つの氣分に溶け合はしむるものは、春雨である。雨の趣味は、一年中の雨の季節たる梅雨の頃を主として後に述べるが、春雨は春の自然の趣味としては大なる役目を持つてゐる。春としては少しく濃すぎる紅梅も、緋桃も、常磐木の古い葉の濃緑も、一たび春雨煙る中に包まれると、和らかな春の氣分になる。先に述べた櫻の花と柳の新芽との和らかな對比も、春雨を得て、一層和らかに、夢の如き氣分となるものである。

夏の驟雨の如き遮しさもなく、秋の雨の如き淋しさ、五月雨の如き鬱陶しさは勿論なく、しとしと降る春雨は誠に落付いたしんみりとした氣分を作る。春雨と柳、春雨と橋、春雨と欄干、春雨と傘、春雨と美人、いづれも四條派、浮世繪派の好題材である。

春の自然と服飾

我々人間が自然の中に生活してゐる以上は、すべて自然の變化に順應してゆかねばならぬ。衣、食、住、何れもさうである。極端の例を擧ぐれば、食に於いては、夏はさつぱりしたものを食し、冬は濃厚なものを食せねばならぬ。住に於いては、一々夏向の家、冬向の家と建て代へる事も出来ないが、出来るならば、夏は夏向の部屋、冬は冬向の部屋に居たい。併しそれも出来ないければ、冬の襖や障子は簀戸に代へたい。座蒲團も、冬が緞子ならば夏は麻のにしたたい。衣になると四季の順應は比較的容易である。冬は綿入、春秋は袷、夏は單衣、猶羽織とか外套とか、いろ／＼寒暖に順應する事が出来る。併し寒暖ばかりでは趣味が満足しない。そこで色とか模様に於いても四季に順應する必要が起る。夫には何うすればよいかと云ふに、色も模様も、矢張自然の色や模様(の材料)に順應すればよいのである。即ち春の色は淡紅と淺緑であるから、それに順應すれば

よいのである。而して最も簡単な順應の方法は、對比と調和を求むるのに在る。之れは色彩の原則であつて、紅と緑とは對比をなし、紅と淡紅、緑と淺緑は調和をする。又黄と緑とも調和をする。そこで服飾の色としては淡紅か淺緑か黄を用ふれば必ず春の自然と調和若しくは對比が出来るのである。併し淡紅の着物とか淺緑の洋服は、小兒の外に年齢の關係上着る事が出来ないから、一部分に之れを用ふるのである。例へば女なら半襟とか、男ならネクタイとか、分量は少量であるが、服飾の中心をなす所に用ふれば全體の心持を作る事が出来る。小兒にまづ十四五歳までならば、淡紅色の振袖や淺綠色の洋服も、春の自然とよく調和し又對比するのである。十七八から二十歳位まで、帯やボンネットやバラソル、スカーフ等ならば悪くない。其の上になると、まづ半襟、手柄、帯上げ、帯、ネクタイ位のものになる。

模様は、春の花、鳥、景色などを用ふればよろしい。櫻の花の友禪など最も應は

しい。菊や月の模様では、秋には可いが、春にはよくない。

春も早春と、晩春とでは大分趣が違ふ、早春は冬から春への入りかけであるし、晩春は、春から夏に移らんとしてゐる所である。従つて早春の趣味は猶冬の趣味を脱せず、晩春の趣味は、初夏の趣味に近づいてゐる。

淡紅の如きも漸次紅の度を高め、淺緑もだん／＼緑が濃くなつてゆく。次に述べらる新緑の趣味は、即ち初夏の趣味で、やゝ緑が濃くなり、つひに夏の青葉の趣味となるのである。

(大正九、五、新編)

新緑の趣味

東京を中心として見ると、爛熳たる櫻の花も散つて、春も漸く行く四月の末から五月の始めになると、野も島も、山も林も、皆一時にし新しい緑に蔽はれます。これ

即ち新緑でありまして、今迄花やかに浮立つてゐた世界が、急に落付いて、しかも落付のうち活動の力が潜んでゐるやうな世界に變ります。丁度男で云つてみれば、二十歳頃、女で云つてみれば十七八歳のまだ志操も定まらず、唯フハ／＼としてゐる花の時を過ごして、男は二十五歳、女は二十二三となり、心も確りして夫々仕事を始めやうとする時期にも似てゐます。

さまざまの新緑

一口に新緑と云つても色々の種類があります。先づ草と木とでわけることが出来ますし、草でも唯一つの芝の新緑もあれば、或は麥島の如く、又は奈良の嫩草山の如く多くの草の集合して一團となつた新緑もあり、木でも唯一本の楓の盆栽の新緑もあれば、奈良の春日の森のやうに多くの木の集合して一團となつた新緑もあります。又草にしても木にしても、其の種類により一々違つた新緑を見せてゐます。而して勿論其の新緑の価値もいろいろあります。特に新緑の美しい木もあれば、花ばかり

美しい草もあり、又實が主として賞されるものもあります。

併し何れにしても、新緑の美は、集合して一團となつた時に、最も其の美を發揮し、新緑の新緑たる價值があるのだと思ひます。一本の草や木の新緑が如何に美しくとも、野一面、山一面、森全體の新緑には、とても及びません。殊に集合して一團となる時には、其の内には一本丈け離しては、新緑として何等値のないものも、それ丈けの役目をつとめてゐます。否なそれあるが爲めに濃淡が出來、單調を破つて、却つて趣のある場合が多いのであります。

奈良の嫩草山の新緑の美は、一度其處へ遊んだものゝ忘れられない美しさであります。それは遠く離れて、嫩草山を一團として眺めてゐるからで、一度嫩草山に近づいて其處に足を踏み入れてみれば、勿論美しい新緑の草もありませうが、少しも美しくない草もあり、遠くから見た美しさとはまるで違つたものであります。その外、何處の森の新緑にしても、何處の野の新緑にしても、遠くから一團として眺

める時に、其の美しさを發揮するのであります。又そんなに大きな一團でなくても、僅に四五十本の木しかない我々の庭でも、それを全體としてみるときは、新緑の美がよく味はれるやうに感じます。

花にも一本の方が趣あるものもあり、又集合した方が美しいものもありますが、花は大抵の場合、一本の方がいゝもので、集合しても悪くなく、集合した方がいゝものも、亦一本でもいゝものであります。例へば山茶花は一輪ざしに活けて最もいいものですが、それが盛花にされても又悪くなく、集合した方がいゝ櫻花も、一枝挿して見られぬ事はありません。所が新緑の方は、楓など一本の盆栽でもみられませんが、葉櫻を一枝挿したのは何の趣もありません。所がその葉櫻も澤山集まり、殊に楓などと一緒になれば、立派に新緑の美を發揮します。要するに新緑の美は、集合して一團となつた時に、其の最高價值を發揮するものだといふ事になるのであります。

新緑の美—色

新緑の美は如何なる點にあるかと云ふに主として色にあります。しかも其の色が繪具ではとても表はせない新鮮さと光とを持つてゐる點にあります。又一口に緑と云ひますけれど、新緑の緑は、其の濃淡に相違があり、それが太陽の光線の強弱、其他雨などの爲めに種々な變化を呈し、到底名もつける事が出来ず、繪具ではとても現はせない種類があるのであります。即ち新緑は、其の色に於いて、新鮮さと、光とを有し、種類が多い爲めに、全く自然の力を藉りる外はない——藝術でも科學でも宗教でも、新緑の色は作る事が出来ない所以であります。

新緑の色は沈靜の意味があり、又寒い色であります。併し青のやうに沈靜しきつては居ません、又青のやうに寒い許りではありません。沈靜の内にも活動が潜んで居り、寒い内にも多少の温味を持つてゐます。桃色の如く浮薄でもなく、赤の如く興奮もしてゐません。どうしても志を立て、將に活動せんとする青年に比べられま

す。少年の色でもなく、中年の色でもなく、固より老年の色でもありません。又女の色でもありません。強いて女に比べると、前に述べたやうな廿二三の確りした者でせうが、新緑の色に比べるやうな女は少いと思ひます。

新緑の美は、主として色に在つて、形は多少關係する丈けです。一本單獨に在る場合は、葉の形によつて趣が違ひますが、集合して一團となつてゐる時は、山なり、森なり、野なりの輪廓が關係する丈けで、細かい形は、直接我々の眼には、殆んど關係がありません。却つて全體の輪廓が大に關係します。細かい形は其の内に含有されて了ふのであります。

新緑との調和及び對比

新緑の色は、濃淡はあるにせよ、大體は緑であります。それを一色と云つても大した差支はあるまいかと思ひます。而して一色でも美しいには違ひありませんが、外に何か調和なり對比なりする物がある時、益々其の美を發揮するのは、色の原則

であります。新緑の場合も固より左様で、唯新緑ばかりでは物足りません。何か其處に他の色が欲しいのであります。例へば新緑の森の傍を紅い日傘が一つ通ると、新緑はその日傘の赤の爲めにすつと引立つて來ます。又新緑の野に一本紅い桃が咲いてゐるとか、傍に川があつて白帆が一つ見えるのなども、非常に引立てる事になります。

それらは新緑を引立てるのに役立つた例を挙げたのですが、立場を換へて考へると、之等の赤い日傘や、桃の花や、白帆は、又新緑によつて、新緑を背景として、非常に美しさを増してゐるのです。即ち我々はこの新緑の季節には、それを背景として、それによつて引立つやうな工風をするのが、賢い方法であります。それを先づ服飾に關して、少しく述べてみやうと思ひます。

新緑と服飾

一本の赤い日傘が、新緑の中に在るとき、それは新緑の美を引立たせてゐると共

に、それが又新緑によつて引立つて見えるものである事を前項で述べましたが、若し其の日傘が茶とか黒であつたらどうでありませう。それによつて新緑は寧ろ汚いしみをつけられたやうなもので、其の傘も亦却つて新緑のない方がいゝ位のものです。その一例によつて考へてみても、新緑時の服飾は、是非とも新緑と不調和にならぬ様、新緑といふ背景を利用するやうに心掛けねばならぬ事がわかると思ひます。殊に新緑の時季は、花の時季と違つて比較的長いのでありますから、一層注意する値があらうと思ひます。

さて新緑と調和せしめる、又は之れと對比せしめるのは、極くやさしい事です。前に例を挙げた赤い日傘は、即ち對比の例で、すべて赤、紅の色は緑に對して對比の美を呈し、緑に近い色、即ち青や黄は調和の美を作ります。又赤でも薄くなるに従つて對比の度が弱くなり、クリーム色の如きは、極く穏やかな對比となり、白色も亦一種の對比的美を發揮します。青や黄も純な場合には強い調和を示し、薄くな

るに従つて、弱い穏やかな調和となります。

これを實物にあて、二三の例を御話すれば、背廣服又は袴、セル、ネル等の着物にしますと、クリーム色が、つたものや、青味のあるものがいゝのであります。一般に着物は大體の部分は薄い色を用ひて、小さな部分、例へば帯とか帯上げとか半襟とかチョッキとかネクタイといふのやうな所へ、濃い色を使ふのが原則ですから、新緑の場合も、あまり濃い赤とか、青の着物は感心しません。尤も新緑が大きな場合には、その前に眞赤な着物の子供を立たすと美しいものですが、それは寧ろ例外の場合です。又いくら新緑の時節でも、人はいつでも新緑の前に居るものでもありませんから、極端の事は出来ません。尤も芝居の衣裳とか、特別の園遊會の假装とかいふ場合には、思切つた強い對比の美を見せるのも面白いでせう。

次に帯やチョッキも、着物や上衣よりは小さいとは云へ、半襟やネクタイに比べては大きいものですから、これもあまり極端な色はいけません。最も十四五までは

赤い帯もいゝものですが、それより大きくなると、赤は帯上げ位にしか用ひられません。で寧ろ帯も青味が、つたものが新緑にうつります。チョッキも矢張さうです。クリーム色が青みが、つたものがよろしい。半襟やネクタイになると、可なり強い色が却つてよくなります。其の位置から云つても、半襟やネクタイは、服飾の中心となり、全體を引しめる役をつとめるのですから、其の心持が必要で、ブローチやピンも其の意味から賞用されるのであります。青磁色、空色、桃色、とき色、うぐひす色、ひわ色、うらは色、といつたやうな色が、新緑頃の半襟やネクタイに應はしいと思ひます。

それから日傘は、子供なら赤もよく、それから大きくなるに従つて、桃色、クリーム色、青磁色、うらは色、白色などが適當します。猶髪飾とか手提とか下駄とか、いろいろありませうが、原則には變りがありませんから略します。

猶一つ注意して置きたいのは、新緑の時と云つても常に新緑の前にゐる譯でもあ

りませんから、新緑の前にゐては、あまりに調和に過ぎる色、即ち新緑そのものの色を服飾に使ふのも一つの方法であります。これは室内などに在つて、毫も新緑のない場合に、其の服飾の色によつて、丁度時節の新緑を聯想し、非常に快感を與へるものであります。丁度新緑の盆栽が室内に置いてあるのと同様であります。要するに時候と共通の色を服飾に用ふる事は、聯想上の美を發揮する點で、服飾上の原則の一つとしていふと思ひます。

併し御化粧にこれを使つてはいけません。新緑時だからと云つて青味のある御化粧は決していけません、却つて赤味のある方にしなければなりません。唯白い許りでも新緑の下では青みを帯びますから、寧ろ赤味を帯ばさねばなりません。白い傘の下のお白粉の顔が、青味を帯びてゐる事はよく見掛けますが、甚だ感心しません。新緑時の御化粧もそれと同様であります。

新緑と記念像

新緑と美術との關係を考へてみますのに、繪畫は室内で味ふものですから、題材とする外には殆んど没交渉であります。彫刻は記念像の如く、野外に立てられ、随分新緑を背景としてみられる事が多いのであります。かの晶子女史の「美男におはす夏木立哉」といふ歌にあるやうに、鎌倉の大佛が新緑を背景として益々よく見える有様は、この歌に遺憾なく現はれて居ります。上野の小松宮の御銅像なども、あの森の新緑を背景とした時に、引立つて見えます。猶像が大理石で作られてゐる場合には、其の色が白いので、一層新緑によつて引立てられる事と思ひます。併し我が國には新緑に如何に美しいのがあつても、これを引立てるやうな記念像は固よりなく、新緑によつて引立てられるやうなものも亦甚だ鮮い事を遺憾に思ひます。然るに建築に至つては、我が國も些か誇り得るのであります。

新緑と建築

美術の内で最も新緑と關係の深いのは建築であります。都會の中央にある空地の

少しもない建築を除いては、如何なる建築も新緑と関係があり、郊外の建築、山間の建築に至つては、新緑と非常に深い関係があるのであります。

而して其の関係は、云ふ迄もなく色彩によつて起るのであります。如何なる建築も其處に何かの背景がなくては、其の美を發揮する事が出来ません。ゴニスゴニスの建築は水によつて其の美を發揮してゐるのであります。空は無論いかなる建築にも共通した背景となるものでありますが、併しその外には樹木が背景として最も多く役立つものであります。我が國の建築は大抵樹木を背景として其の美を發揮してゐます。これを新しい例にとつてみても、四谷見附附近の上智大學の建築を外、淺緑の電車から見る時、松がどれ程あの建築の美しさを増して居るでせうか。帝國大學正門中の公孫樹の新緑が、ゴシック式の法文科、工科大學などの建築の美を助けて居る事は如何ばかりでせうか。

更らに古建築を顧みると、我が國の建築は實に新緑と離るべからざる深い關係

を持つてゐる事を發見します。それは云ふまでもなく神社、佛閣の丹塗であります。丹塗と新緑、それほど美しい自然と藝術の色の對比は、外になからうと思ひます。奈良の春日の森を分け入つて、其處に丹塗の春日神社を見る時、日光の神橋の丹塗を日光山の新緑の前に見た時、誰か新緑と丹塗との美を讚美しない者がありませうか。其の外かゝる例は枚擧に遑なきほどあります。記念像に於いては心細く感じましたが、茲に至つて誇りを感じます。

猶此の新緑と建築については新古の例を擧げて述べたいのですが、既に數年前に、「みどり」と建築」と題して書いた事があり、それが書物にも收めてありますから、今は以上に止めて、他は賢明なる讀者諸君の想像に御任かせする事とします。

(大正五、五、趣味之友)

雨の趣味

自然の趣味の内には、山川草木の如き類と、日月星辰の如き類と、雨露雪霜の如き類と、約三通りの趣味があります。何れの趣味にも特色があつて、一概に優劣はつけられません。今は、丁度五月雨の時節に當りますから、最も縁の深い雨について、少しく其の趣味のことを書いてみやうと思ひます。

雨と云つても、いろ／＼の種類があります。しと／＼と降る春雨もあれば、盆を覆へすやうな夏の夕立もあり、淋しい秋雨もあれば、寒い風を伴ふ冬の雨もあり、又鬱陶しい五月雨もあります。さうしてその種類に従つて皆それ／＼違つた趣味があります。柳の若芽に煙るやうな春雨の長閑さ、いかにも艶な女の趣がありますし、乾ききつた河原の石を轉ころばすかとはかりに勢込んで降る夕立には強い男の趣があります。併し何れにしても、雨は單獨にはあまり趣の無いもので、何かの背景があります。

又これに添ふものがあつて、始めて趣が出て來ます。例へば春雨ならば、柳の木があつて、そこに蛇の目傘を指した女が通るとか、夏の夕立ならば、向ふに山があつて、手前に川がある、河原に急ぐ男は用意の蓑をとりだして走るとか、五月雨ならば、青葉に降り濺ぐとか、即ち柳、傘、山、川、蓑、青葉など、いふやうな背景なり、添へ物があつて、始めて雨の趣味が發揮されるのであります。

動の趣味、音の趣味

雨の趣味は「動」の趣味であります。新緑の如き全然「静」の趣味であり、花も落花の場合を除いては「静」の趣味であります。雨はいくら静かに降つても、「動」の趣味であります。しと／＼と降る春雨、じめ／＼と降る五月雨から、盆を覆すが如き夕立に至るまで、すべて「動」の趣味であります。併し感じの方から云ひますと、静かな雨は却つて心を落付かせます。風は心を騒がせるものですが、静かな雨は降つた方が却つて心を落付かせるものです。

雨は「動」の趣味で、従つて時間的の趣味を持つてゐます。花や新緑は、一眼見た一瞬間でもその趣味が得られますが、雨は少くとも數分間、長ければ數時間もかゝつて始めて其の趣味を味はふ事が出來ます。夕立の如き、性質上短時間の雨でも、一瞬間では其の趣味が味はれません。少くとも數分間、否な降り止んだあとまで見て、始めて夕立の趣味が十分味へるのであります。況んや春雨、五月雨、秋雨の如きは、數時間降つてゐる内に、其の趣味が得られるのであります。

雨は固より水でありますから、形もなければ色もないのが本體であります。併し實際は細長い線の如き形があるやうに見え、又白雨といふ言葉もあるやうに、白く見えるものであります。併しもとく／＼水滴なのですから、花や青葉のやうに、明瞭な形と色とを持ちません。其の代り、花や青葉の持たない「音」を持つて居ます。勿論花や青葉も風によつて多少の「音」を出しますが、それは寧ろ風の趣味であつて、花や青葉の趣味ではありません。落花や落葉も、詩に歌ふほど音のあるもので

はありません。これに反して雨は、天空から降り來つて、必ず地上の何ものかに當り、可なり高い音をたてます。而してこの音が雨の趣味の少からぬ部分を占めて居るのであります。試みに春の夜、部屋の中にあつて、しとくと降る雨の音を聞いて御覽なさい。外を少しも見なくても、春雨の趣味は十分に味ふ事が出來ますから。戸外に居る時は別として室内に居る場合には、誰しも先づ軒か庭の木の葉に當る音で雨の降り出した事を知り、其の趣味を味ふのであります。雨の程よい音を聞いてゐると、何となく落付いて、一種云ふべからざる穏やかな感情が起るもので、親しい友としんみり話す時などの情調には、最も應はしいと思ひます。觀劇の夜なども、あまり晴れたのや、風のあるより、靜かに小雨の降つてゐるのが最も應はしいのであります。

雨の色はあまり趣味に關係しませんが、雨によつて濕めらせられた色は、甚だ趣味深いものです。新緑にしても、雨に濡れて殊に澤つやを増し、幹や枝は全く變つたい

色となります。又石は濡れて始めて、趣味を發揮する位で、石燈籠も飛石も、非常にいゝ色となります。土は石ほどではありませんが、乾いたときよりも餘程趣が深くなります。併しこれらは打水をしても同じやうな結果となりますから、殊更雨の趣味とも云へませんが、雨に附随した趣味としては主なものだと思ひます。

雨と美術

雨は繪畫の題材として多少用ひられてゐます。西洋畫では寧ろ少いやうですが、日本畫、殊に浮世繪派の繪には可なりあるやうに思はれます。美人の雨に惱める風情は、浮世繪の最もいゝ題材で、春信、湖龍齋など之を描き、又廣重の風景畫にも多く、東海道五十三次では大磯に雨を描いてゐます。すべて版畫には、雨が殊の外趣を添へるものです。

演劇にもよく雨を使ひます。これも場合によつては面白く、傘を持つと、いろいろおもしろい型が出來ます。

建築も雨中でみると、又變つた趣のあるものです。嘗て奈良の藥師寺の東院堂で夕立に遇ひ、夕立中の東塔を非常にいゝと思ひました。

雨と服飾

雨は服飾の意匠の材料としても相當に使はれます。一時紺の御召に、白で雨を緋風に現はしたのが非常に流行したのは、誰しも記憶に新たな事だと思ひます。此頃でも浴衣の模様などには雨の意匠があります。細かなものにも又中々用ひられてゐるやうです。

次に雨の時節に應はしい服飾、五月雨頃に適した服飾に就いて少し述べてみませう。尤も雨の時と云つても、室内に雨が降つてゐる譯ではありませんから、勢ひ外套やコートや傘、下駄の類の事になります。男の外套としては、近年流行してきたクレバネット（防水布）の物が丁度應しいやうです。防水布に二色あつて、青みがゝつたものと、茶のかゝつたものとありますが、五月雨の頃としては勿論青みがゝ

つたものが調和し、秋雨、冬雨ならば茶が、つた方がよからうと思ひます。此の雨外套のボタンは平たい滑かな貝などが應しく、羅紗の外套につけるやうなのは調和しません。何時か雨外套に皮のゴツ／＼したボタンを着けてゐるのを見て大變不調和だと思つた事があるので一寸書き添へました。洋服でもチョッキでも、ボタンとはよく調和するのを選ぶ事が肝腎です。

女のコートとしては、雨の時は御召はいけません。大鳥とか米琉とか、或は薩摩がすりが一番だと思ひます。薩摩がすりは中々面白いものです。下駄は爪皮もさつぱりしたものがよく、爪皮に繊巧な模様などつけるのは餘計な事です。

傘は最も雨に縁の深いもので、雨の趣味を助ける事も非常なものであります。橋の上や柳の蔭など、蛇の目傘斜にさしかけて来るのは、顔は見えなくても、美人らしく聯想されるものです。女には無論蛇の目傘、男は洋服の時は洋傘でなければいけません。併し女の洋日傘パラソルが一種の趣味あるに引かへ、男の雨洋傘はあまり趣味も

ありません。雨傘はどうしても日本の蛇の目に限ります。蛇目傘と云つても此の頃は色々の色を用ひ、おまけに模様をつけたり何かしますが、これも程度問題で、成るべくあつさりと、いゝ模様をつける位のところで、あまりくどく悪い模様をつける位なら無い方がましです。傘は藍色がかつたのが、五月雨には最も調和します。

(大正五、六、趣味之友)

夏の衣食住の趣味

夏の趣味を色にたとへて眞紅といふのは、灼熱せる太陽の光線からの聯想で、何人も感ずる所であらうが、單に眞紅ばかりでは、現はし盡してゐない。どうしてもそこに深緑色を加へねばならぬ。それは云ふまでもなく草木の葉の色から來る感じで、他の季節には決して感じられない色である。而して眞紅と深緑と、何れも其の度が強いところに夏の趣味の特色があり、其の兩色が強い對比を呈するところに又

夏の趣味の發揮を感じるのである。而してこの自然の色が衣服、服飾を支配する根柢となる事を忘れてはならない。眞紅の色は太陽の色であつて、其の感じは頗る熱い、深緑の色は草木の葉の色であつて、其の感じは冷たい、その熱と冷と、夏の趣味は此の兩極端によつて律せられる。夏の趣味の内、大自然に關するものは次の項に譲り、平生の衣食住に關してまづ考へてみよう。

住宅

普通衣食住と云つてゐるが、平生吾人の趣味を最も支配するものは住である。住が我々の趣味の根柢を作るのである。この事は敢て夏のみに限らず、春夏秋冬すべてを通じてさうである。しかも春夏秋冬を通じて比較的變らぬ趣味を提供するものは住である。變らぬ——否な變へられないのである。そこが衣や食と、非常に相違してゐる點である。衣は春夏秋冬によつて變るは勿論、同じ夏でも朝に夕べに變へる事が出来る、食も一日に三度變へる事が出来る。然るに住は左様行かぬ。たとひ

貸家住ひで度々移轉するとしても、春から夏になる時だから春の家から夏の家へ移るといふ事は出来ぬ。春の衣、夏の衣といふやうに、春の家、夏の家といふものは無い。況んや朝食、晝食、夕食の如く、朝の家、晝の家、夕の家などありやうがない。併し住はかく變へられぬ所に其の特色があり、衣や食と異なる趣味があるのである。變らない、即ち一定不變であるが故に、長く同一の趣味を人に保たしむる。これ住が人の趣味の根柢を作ると云つた所以である。

少しく之れを具體的に説明してみやう。例へば極端な例をとつて、禪寺に住まつたとする。さうすると、其の人にはいつの間にか禪の趣味が充滿し、それが根柢となつて、衣食は時々變へても、つひに禪趣味から脱れる事は出来ない。晴れやかな西洋館に住へば、又その趣味が根柢になる。かの長く花柳界に居つたものが、後に堅氣の社會へ出ても、始め根柢となつた花柳趣味は中々ぬけるものでなく、一生それが支配してゐる事は往々見受ける例である。勿論それらは單に住ばかりのことで

なく、衣食住ともに禪趣味、洋風趣味、花柳趣味が一貫してゐるために、一層その趣味に化せられるのであるが、其の根柢は必ず住にあるので、衣食は必ずしも其の趣味に従はなくてもすむが、住丈は、其の住んで居る所から脱れるわけに行かぬ。もし脱れたとすれば、もはや其處に住んでゐるとは云へないのである。

話が少し横路へ這入つたが、要するに住の趣味は不變的で、又根本的である。と云ふのは住は其の性質上變へられないからである。即ち春夏秋冬によつて住を變へると云ふ事は、普通出來ない。別荘を有する人と雖も、四季別々の別荘を持つてゐる者はあるまい。又大なる住宅で、特に夏向の部屋を作るとしても、四季別々の部屋を作つたものはあるまい。故に特に夏の住宅について其の趣味を説く事は、困難であり、強ひて説いても實際とはかけ離れた議論になつて了ふのである。併しとにかく、極く稀な夏向きの部屋と、夏向の別荘とは、夏の住宅として考へられる唯二つの場合である。

夏向きの部屋は、風通しのいい事と、日に遠い事とが主な二條件である。いくら風通しがよくても、日に近い時は暑くていけない。南北に二部屋以上つづけて置き、南北を明けて、北の部屋が其の條件に合ふ。又天井の高い、若しくは三階のある家の二階で、南北を明けた部屋も亦條件に適ふやうである。猶縁側を廣くとする事も夏向の部屋には一つの要件である。而して夏向きの別荘には成るべく夏向きの部屋を多くとする事と、浴室を十分廣くとする事とが主な條件であらう。

夏向きの部屋とか夏向の別荘といふ特別の建築でなしに夏向きの住宅がある。我が日本の住宅は即ちその最もいい例で、障子一つはづせば、立所に夏向きの部屋が出來。夏向きの住宅となるのである。廻縁など、云ふものゝあるのも夏向きの證據である。縁側は決して冬の役には立たない。又日本の住宅は素木造であるが、この木材を用ひて、それを削つた許りで置く事は、夏向きの感じを與へるものである。尤も熱には濕熱と乾熱とあつて、日本の木造の住宅は見た眼には、何れの熱の場合

にも涼しく見えるが、乾熱の場合は、實際住宅の内に這入つては非常に暑い、却つて煉瓦造の壁の厚い方が、熱を導かないで涼しい。故に日本の住宅が夏向だと云ふのも日本のやうな濕熱だからであつて、印度の如き乾熱だつたらたまらない。

この日本の住宅の夏向きの點を巧に採用したものが、近年亞米利加に現はれた。それは即ちバンガロー式と稱するもので、一名チャバナスクとも云ふのは、其の起源が日本にある事を證明してゐる。此のバンガロー式の外に、コッターチ式と稱するものは、皆多少夏向である。又セセッション式のあるものなども、夏向きの觀がある。

住宅といふ程のものでないが、庭や公園などに設けられる四阿や亭などは、全然夏向のものである。又京都あたりにある古い茶室も多く夏向きである。又これも京都の大きな禪寺の方丈なども、夏向きで甚だ涼しい。それから庭園建築——例へば金閣の如きも夏向きの建築である。寢殿造も夏向きの點が大分あるやうであるが、

殊に其の泉殿、釣殿などは夏向きの部屋の好例である。それは住宅に限らず日本の建築が夏向きである事を昔の例によつて示したのである。

裝飾と家具

夏の家を特にもつてゐない人、又夏向きの部屋も持つてゐない人——つまり我々多くの平民——は、裝飾と家具とによつて夏の住に變化を與へる事を考へねばならぬ。たとひ貸家住ひでも、或は下宿屋でたつた一間を借りてゐても、寄宿舎の如く多くの人で一室にゐる場合でも、裝飾と家具とによつて夏の趣味を發揮せしむる事が出来る。

まづ主な點から云ふと、襖や障子を簀戸又は翠簾に換へ、ある所のは取り拂つて了ふ。簀戸に換へるのは億劫だとしても、取拂ふだけなら何處の家でも出来る事である。それから縁には莫座を敷き、縁先きに簾を掛ける、それも上等のを選ばなければしやすい事である。それで部屋の大體の調子は夏向になつた。次には裝飾であ

るが、軸はあつさりした南書、床が小さければ俳書もよからう。額も同様、これは書の方がいゝかもしれぬ。花瓶、香爐、置物等は無理に揃へず、くどいものなら置かぬ方が却つていゝ。机、書棚等は特に夏に換へると云ふ事も出来まいが、團扇置の上の團扇、軒の岐阜提灯、釣葱、燈籠などは特に夏のものである。それから座蒲團、茶道具、菓子器、更らに食器、酒器なども皆夏らしいものが用ひたい。

活花と盆栽とは、自然を材料として人工を加へたものであるが、夏は葉のあくまで青いものがよく、花も白百合のやうに、すつきりとして清いものはいゝが、なくともよい。花の活け方は無論投げ入の事。庭になるともはや自然の一部に入る。これはあまり茂つた枝や葉に手を入れる事と、打水は毎夕たつぷりとほしい。

衣服と服飾

夏の衣服と服飾とは、地ぢで云へば薄くサラ／＼したものの、色で云へば白か、藍、青の類、又赤も少量ならば適する。地の要件は主として肌ざはりはと涼しいのだから

來てゐるので、麻とか紗とか縮のやうなものが、其の要件に適ふ。白は光線を全部反射する所から涼しいのと、眼に見えて涼しいのでよく、藍や青は寒い色であるのと、夏の自然の色と調和する爲めによく、赤は感じから云ふと暑いのだが、暑い時の暑い色は、強い調和の美を呈する、殊にそれが大なる白、廣い藍や青の間に一點ある時、例へば、白麻の服に赤いネクタイとか、藍の浴衣に赤い帯上げなど最もいゝ効果を呈する。而してその藍や青や赤が衣服、服飾にいゝのは、夏の大自然の趣味から來てゐる事である。

白と藍との色を以つて、夏の衣服の趣味の一根柢を作るものは、所謂中形浴衣である。中形浴衣は、意匠家の苦心と、需用者の選擇とによつて、年々變つたおもしろいものが現はれ、それが體の形のまゝを現はす女の美しさと相待つて、日本の衣服としては、類のない生々とした美しさを發揮する、夏は女の美しい時であり、中形浴衣は最も美しい衣服であるが、それは女の體と浴衣と兩々相待つて、互に其の

美を救け合ふからである。

翡翠が其の美を最も發揮するのは夏である。夏の服飾には、其の獨特の色を以つて他の寶玉を壓してゐる。帶止のボタン止めに、ネクタイピンにブローチに、はた指輪に根掛に、翡翠の小玉は夏の服飾の焦點を作るものである。金屬は金よりも銀が夏にふさはしい。紅玉ルビーや珊瑚は夏のものでない。

女の髪は、日本髪では銀杏返しが最もよく、次では薄型の丸髷か。束髪は前を分けたのが、夏らしいが、これは顔による事である。御化粧は云ふまでもなく極く薄化粧がいゝ。若し天の成せる麗質があらば、素地キダの儘もよからう。香油、香水はなるべく少量、どこから匂つて來るかかわからぬ位にして貰ひたい。

食

食物の趣味の本領は舌の趣味であるが、眼の趣味から離すことは出來ぬ。即ち食器の趣味は必ず食物の趣味に伴ふものである。食器は既に家具の項に一寸擧げて置

いたが舌の趣味に聯關する點に於いて、食器は他の家具とは大に趣を異にしてゐる。必ずこれに食物を盛るのであるから、或る點では畫に對する額縁、或は進んで背景の役をする。即ち食器によつて食物が引立ち、まづ箸をとる前に眼の趣味を感せしめる。而してそれが先驅となつて、舌の趣味が続くのである。食物もまづ色と形と質の工合が眼の趣味に訴へられ、次いで舌の趣味になる。舌の趣味は本領であるから、それで結構であればいゝやうなものゝ、其の前に食物そのものゝ色や形、又食器の色や形などの眼の趣味に於いてよければ益々いゝし、それが悪いと、あとで舌の趣味としてよくても夫程に感じないやうな事になる。又食器が結構だと、食物も實際以上に良く味へて來るのである。それは一般の話であるが、夏の食物としてはあつさりとした味のもので、見ても涼しさうなもの、鱸カサゴのあらひ、冷し豆腐と云つたやうなものなどは、色からしてそれに適する。食器も同じ道理であつさりしたものがいゝ。

(大正五、七、趣味之友)

山の趣味

自然に對する趣味は、最もよく四季の變化を説明する。純正美術は固より、應用美術にしても、衣食住にしても、自然のやうに四季の變化がうまく行くものは無い。純正美術や應用美術の作品を裝飾として用ふる場合も、なるべく四季に適應するやうに取り換へ得るのみで、衣食住の如きは、四季の變化に支配されつゝ、しかもこれに適應してゆく能力が未だ十分に發揮されてゐないやうに思はれる。併し、この四季に支配されず、一年を通じて、否な多年の間一定不變の趣味を有する所に、人工物の特色が存するので、自然の趣味が四季によつて絶えず變化するのと相俟つて、我々の趣味生活がうまく行くのである。

要するに趣味の對象としての自然は、四季によつて刻々變化し、趣味の對象としての人工物は四季によつて變化しないといふ事になる、即ち我々の趣味の對象には、

四季によつて變化するものと、しないものとあつて、兩々相俟つて對象が豊富になり、充實する事になるのである。併し自然のうちにも比較的變化しないものと、人工物の内にも變化トといふよりは夏向のもの冬向のものといふやうに、物によつて四季の區別をする事——がある。それらが錯雜して所謂四季の趣味が、夫々特色を持つて面白く發揮されるのである。

山の遠望

山といふのは、實は漠然たる名で、山には樹、草、花、鳥、蟲其他種々のものが含まれてゐるが、趣味の對象としては、遠くから眺める場合と、之れに登る場合との二つに分けられ、何れも夏の自然の趣味として最も著しきものである。

遠くから眺める場合に、主要なる點は其の形、輪廓である。孤立した山にしても連山にしても、何れも其の形が大切である。禿山であるか、樹木があるかなど、云ふことは、遠くから眺める場合は問題にならぬ。これは山に限らない、人間でもさ

うである、建築でもさうである。姿が美しければ、顔の美醜や、細部の巧拙は問題にならない。人間や建築だと、遠くから眺める場合よりも近づく場合が多いから、姿だけいゝからと云つて済まして居られないが、山は寧ろ遠くから眺められるだけで済む方が多いから、形の價値が一層大である。富士山を遠くから眺めた人は、登つた人に比べて非常に多に違ひない。であるから山なら形だけよければ、それで威張つて居られるのである。

富士山の形の美

さて孤立した山の驚くべき標本は、云ふまでもなく我が富士山である。富士山の形の美は、遠く上世から歌に詠まれ、今日の我々も幾度見ても飽かない。又外國にも知られ、フジャマの名は世界に高い。即ち富士山の形の美は、古今東西を貫いてゐるのである。何が故にかく富士山の形が美しいか。それは難しく云ふと、三つの理由がある。一つは單純といふ事である。山としてあれ程單純な形を持つたものは

無い。一つは下に擴つてゐて据りがいゝ事である。もう一つは其の曲線の性質が強からず弱からず程よい事である。即ち「單純」と「落付き」と「曲線美」との三つの美が、うまく結合して富士山の形の美を成してゐるのである。

この三つの點は、美學上の形式法則から云つても重要な事で、即ち富士山は美學上の形式法則によく適つた形を持つてゐるからあんなに美しいのである。これを女に比べてみると、洋裝の西洋人によくこの三法則に適つたのを見かける事がある。即ち形からも色からも單純で、裾が擴つてゐて、曲線の美しいのである。これは富士山と同様の理由で美しいのである。富士額などいふのもほぼ同様である。日本の女も着物の裾を引いた時に、その形が目立つて美しくなるのは、下が擴がつて落付がよくなるのと、その裾の曲線の美しい爲めである。

雲の變化とか、日や月との關係なども富士山を美しくさせる場合が多いが、富士山として、他の何物の力も藉りる事なしに、美しさを擅にする事の出来る理由は、

前述の如き美的形式法則に適つてゐるからである。もう一つ富士山が大きく高いといふ事も、形の美しさを増す理由であらうが、これは裾野に近づいて、莊嚴を感じる場合に重要な事で、遠くから眺める場合は——大きいからこそ遠くから眺め得るのではあるが——必要としない。小さな富士山形の置物でさへ美しいではないか。富士山の形の美の一理由が單純にある事を述べたが、單純のみが決して唯一の美ではない。單純を破つたもの、進んで複雑なものも亦美しい。唯複雑の場合には「統一」又は「調和」が必要となつて来る。箱根附近の連山の上に富士山を眺めた時、其の全體は可なり複雑であるが、富士山はよくこれを統一し、全體として美しい形をなす。又それ程明かな統一のない場合でも、連山が互に調和する時は美しい。統一も調和もない複雑の場合だけが困るのである。併し、いかに統一や調和があつても、あらゆる場合に於いて單純はつひに複雑に優る事を余は信ずるものであつて、富士山はその最もいゝ例であると思ふ。

富士山の形の單純は、單に一方から見た時ばかりでなく、あらゆる方面から見てさうである。だから富士山は何處から見ても美しい、所謂富士見十三州の何處の地點から見ても飽かず眺められるのは我が富士山である。

孤立した山でも連山でも、其の曲線の性質によつて男性的の表現ともなれば、女性的表現ともなる。關東の山は概して曲線が強くて男性的であるし、關西のは曲線がなだらかで女性的である。男性的の内にも山骨の現はれてゐる山などは特に老人の表現を持つてゐる。大和山城附近の山は殊に曲線がなだらかで、女性的であるが、其の代表者は奈良の嫩草山である。嫩草山はどうしても女性的の山である。

富士山も遠くから眺める時は、どちらかと云へば女性的である。しかも其の女性たるや世の常の女性ではない。高貴の氣高くして美しく、年も三十を過ぎた位の確りした女性である。全く木花咲耶姫を形に現はしたやうに思はれる。所が近づくに従つて莊嚴を増し、裾野でふり仰ぐと、もはや女性ではなくて男性となり、しかも

偉人の感じがする。而して一度登つて八合九合から頂上に至り、下界を俯瞰すれば、我々小さな人間までも、偉大な富士山のお蔭で、大人物になつた氣が生ずる。

登山

遠くから眺めてゐたものが、何時の間にか登山して、はや頂上の話まで出たから、遠望の趣味はこの位として登山の方に移る事としよう。所が余は富士山丈けは一度登つたが、他は殆んど有名の山に登つた事が無いので、實驗上の登山の趣味を説く資格がない。唯登山するとなると、遠くから眺めるのと違つても、はや形は眼に入らぬ、即ち形式はわからなくて、實質に直接ぶつか、事になるのである。従つて其の山を成す岩石と土壤、その上に生えた樹木と草、それに住む鳥獸と昆蟲などが、趣味の對象となつて来る。而してこれらは細かしいこと、とても一々云つては居れないが、所謂高山植物の特色ある美しさは特筆すべきものだと思ふ。殊に面白いのは、下の方は夏草が茂つてゐるのに、登るに従つて秋草が咲いて居り、頂上には

雪があると云つた様に、四季の變化が一つの山で味へることである。猶動植物以外に登山といふこと自身にいろ／＼の趣味があると思ふが、それは登山家の話に譲ることにする。

山は遠くから眺める場合は、特に夏の趣味とも云へない。雪の富士の眺は夏にも優るものである。併し登るとしては、夏の趣味である。殊に避暑及び旅行の目的としては夏の自然の趣味の中の大關たる資格がある。(大正五、八、趣味之友)

水の趣味

山を夏の自然の趣味の東の大關とすれば、西の大關は云ふ迄もなく水である。尤も自然の景色を一口に山水といふ位で、山と水とは四季ともに自然を代表するものであるが、夏の自然の趣味としても此の二つが主なるもので、殊に水は、種々の形に於いて夏の趣味となるものである。先づ最も大なる海を始めとし、湖、川、池等か

ら、小は水盤や金魚鉢の水に至るまで、夫々種々の趣味がある。

海 洋

海にも種類があるが、大洋を船で航海しながら味ふ趣味と、海岸にあつて海を眺める趣味とは大分違ふ。又海岸といつても崖の上から深い海を俯瞰するのと、砂濱で遠淺の海を眺めるのとは違ふ。大洋であれば壯大な感じがするし、崖で深潭を俯瞰する場合は凄い沈んだ感じがするし、砂濱で遠淺の海を見れば穏やかな感じがする。何れも美しいには違ひないが、其の美の性質にはそんな相違があるのである。海の趣味の特色は廣大なことゝ、絶えず動いてゐる事とである。特別の場合を除いて、海を見れば廣大を感じ、又大洋と海岸とを問はず、「動」を感じる。山は寧ろ「静」の趣味であるが、海は「動」の趣味である。

湖と川と瀧

湖にも大小あるが、小さい時は海と違つて静である。且つ周圍を陸で圍まれてゐ

る爲めに寧ろ狭い感じがする。尤も大きい場合は餘程海に接近し、廣大にして「動」を感じるが、小さい場合は海と反對になり、池となつては、全く違つて来る。川も大小と流の遅速で大に相違はあるが、概して「動」の趣味である。所謂急流になると、非常に激しい「動」の趣味を生ずる。海の怒濤と川の急流とは、水に於ける「動」の趣味を代表するものであつて、山の静かなのといふ^{コントラスト}對比を呈する。殊に急流の趣味の極端の場合として、瀧がある。瀧は水として「動」の最も甚しいものであるのみならず、自然のあらゆる趣味の中でも、「動」の横綱と云つていふ。華嚴の瀧の美しさは、實に其のすさまじき「動」から起るのである。

水の特色と船

水の趣味は、山の趣味と違つて、遠くから眺める形になく、主として近く見る實質に在る。清らかな、透明な所に在る。水盤や金魚鉢の如き小さな水には「動」の趣味はない。其の趣味は清らかな、透明な點と、涼しい感じとから起る。又水には物

を濕して趣味ある色に變ずる性質があり、石も砂も水に遭へば美しい色を呈する。

水に聯關しては、すべて水に接する部分、即ち海邊、湖畔等が趣味を助ける事となる。單に水丈けでは比較的趣味も淺いが、陸や容器と結合して千姿萬態の趣を現出するのである。又登山に對して航海、船遊び、游泳の趣味がある。大汽船で大洋を航海するのから、瀬戸内海、琵琶湖等の遊覽船、古くは屋形船、近くはモーターボートに至るまで、船の趣味は非常に多い事と思ふ。

(大正五、八、趣味之友)

新秋の趣味

四季の趣味を色にたとへてみると、春は薄くれなる、夏は眞紅、秋は茶褐色、冬は灰色であると、前に述べたが、こゝには其の茶褐色の趣味について少しく書いてみたいと思ふ。

秋の趣味は色にたとへて茶褐色と云つたのは、自然——殊に木の葉の聯想からで

ある。秋になると誰れでも知つてゐる様に木々の葉が黄、赤、或は茶褐色に變はる、その點から聯想するので、これ夏の趣味が眞紅の外に深緑色であるといふのと同様である。そこで其の深緑色から茶褐色に變りゆく途中が考へられる、茲に主として述べんとする『新秋の趣味』は即ち深緑色から茶褐色に移りかけたところに當るのである。これは茶褐色としても色猶淺く、徹底した秋の趣味は未だ味へない。併し夏の強烈な趣味から脱れて、秋の寧ろ靜穩な趣味に入るので、人の心持は非常にいい、若しも夏の深緑と眞紅の趣味から、直ちに秋の濃い茶褐色の趣味に變つたならば、人は其の刺戟に堪へまいと思ふ。昨日青葉をみて今日紅葉をみるのでは面白くない。その間に長い徐々の變化があつて、始めて紅葉も美しく、其の間にも亦趣味があるのである。

四季の變化は常に徐々であつて、所謂漸層法に従つてゐる。多少の不順はあるにしても大體は漸層法を外れない。これ自然の趣味が何時も誰れにも喜ばれる所以で

ある。嘗て余は十月十二三日頃日光に遊んだ事がある。その時馬返しの邊は猶僅かに紅葉せんとしてゐる位であつたが、上へ登るにつれて濃くなり、中禪寺から湯本に向ふと、湯湖の邊りなどは全く紅葉しきつてゐたので、自然の漸層法の妙な事に驚嘆したが、平地に於いても、此の漸層法は行はれてゐるのである。八月の末、夏が漸く終を告げてから、九月の始め秋に入つて、其中旬以後や、秋らしくなつてゆく自然の變化は全く漸層法であつて、極く穏かな調和の趣味である。尤も二百十日前後の暴風雨、其他時々の不順の天氣は、多少單調を破るが、しかも大體としては漸層法を外れない。一年の間に、盛夏と嚴冬とを兩極端として、春と秋とは一般に漸層法の趣味であるが、殊に初春、晩春、初秋、晩秋などの頃は、最も漸層法の趣味を發揮する季節である。

虫

初秋の趣味の中、最も著しいものは蟲と月とである。蟲は其の翅によつて種々な

音を出す、其れは随分いゝ樂音で、一種の拍子もついてゐる。自然の音の中で、これほど洗練されたものは無く、全くこれを蟲の音樂と云つてもよからうと思ふ。雨の音とか、松籟とか、溪流の音とか、自然のうちには、耳の趣味も少くはないが、蟲のなく程微妙なものはない。普通の松蟲、鈴蟲、蟋蟀、蟻蟲など、とりくにいい音樂を奏する。

蟲のねの趣味は極く靜かなデリケートの趣味である。女性的であつて男性的でなく、老人的であつて、青年的でない。これは蟲のねが主として夜のものであつて、晝のものでない爲めであらうが、蟲のねそのものゝ性質が微妙にして幽寂なるが爲めである。中にはガチャ／＼の如きものもあるが、それは寧ろ例外である。又蟬やきり／＼すは、夏の蟲であるからこゝに云ふ内には入らない。今云ふのは秋の蟲である。秋の趣味は色で云へば茶褐色、人で云へば老人であるから、蟲のねがその秋にある事は、いゝ調和である。蟬の如き男性的の音は、秋になくて夏にある。大白

然の趣味の配列の巧みな事には今更ながら驚かれる次第である。

蟲は籠に入れて窓にかけたのも、縁に置いたのも悪くはないが、夫よりも自然の草叢から、どこともなしに、其のねの聞こえて來るのが床しいものである。

月

月は秋の趣味として著しいばかりでなく、あらゆる自然の趣味の中で大なるものである。月の美しさは古今東西幾多の詩人によつて歌はれてゐる。自然も人工物も、月光の下にはすべて美化されるのである。其の美感は、嘗て高山樗牛によつて『月夜の美感に就いて』なる一文に遺憾なく論せられた。月夜の美感の主要原因は、月光の性質から來る。月光は太陽光線に比して著しく青味を帯びてゐる、而して此の太陽光線と異なる光線によつて、萬象を悉く日光の世界から月光の世界に持來たすのである。故に月光の世界にあるものを一々説かねば月の趣味は十分明かにならぬ。尤もこれは月の趣味の半面であつて、他の半面は月そのものを見る所にある。三日

月から満月となり、二十日過ぎとなるまで、さまざまの形が味へる。而して山の端の月、野の月、海の月など、所によつても亦色々な趣味がある。即ち月の趣味は、月そのものと、月光を浴びた萬象とによつて生じ、多くの場合兩者を結びつけて味ふのであるが、要するに其の根本は月光の性質に在るのである。これは月の趣味に就いてほんの一端を述べたに過ぎない。(大正五、九、趣味之友)

秋の趣味

新秋といふ季節は、東京で云へば九月の中旬から十月の初旬まで、あらう。十月の中旬からは本當の秋で、十一月の中旬から下旬へかけては晩秋となり、十二月に入つて冬となるものである。

秋の趣味も新秋の趣味の繼續で、蟲のねも月の光も愈々冴えまさる時である。さうして自然は茶褐色が漸次濃くなると共に、緑の分子は日々に薄れて、つひに常磐

木の外には無くなつて了ふ。此の頃の趣味の代表として、秋草と菊と紅葉とを擧げたい。

秋 草

秋草と云へば色々あるが、所謂秋の七草が中心をなしてゐる。草花は春から夏を経て秋まで、多くの種類があるが、春には春の特色があり、夏には夏の趣があると共に、秋には秋の特徴がある。春の草花は一般に艶やかで、紫とか桃色とか黄色などがその心持を現はし、夏の草花は眞紅とか白とか極端なものが特色を發揮し、秋の草花は色はいろ／＼あるが、何となく落付いた色で桃色や眞紅なものは相應はしない。春の草花は堇、紫雲英、菜の花などで代表され、夏の草花は朝顔、カンナ、松葉牡丹などで代表され、秋の草花は即ち秋草で代表される。春は若い女、夏は青年、秋は年増の婦人、冬は老人と云ふやうな趣が草花にもある。

秋草は美しいが、その美しさは地味である、さうして淋しくて落付いてゐる。春の血の失せた清楚な四十前後の婦人といった趣である。前栽に植ゑてよく、庭の一隅にも適し、薄い鉢植にもふさはしい。又野に山に秋の趣味を溢らすものは秋草である。

菊 花

菊は春の櫻と共に秋の花の王であつて、我が國としては帝室の御紋章ともなり、特別の待遇を與ふべき花である。菊の花は随分美麗なものもあるが、どこことなく上品で、艶麗といふよりも清麗といふべきである。殊に白菊の如きは清楚の趣に富んでゐる。併し菊花の本領は黄菊で、其の大輪なものは、王者の姿をみるが如く、誠に皇室の象徴として相應はしい感を抱かしめる。

菊花は群をなしてゐるよりも、一本がいく。一本の菊花に秋の趣を味ひ、我が皇室の尊さを見る事が出来る。菊に似た花で近頃ダリヤが盛に賞美されるが、これは艶麗で、夏にふさはしいものである。却つてコスモスの方が菊に近い趣を持つてゐる。

野菊は可愛らしいもので、野趣を帯びてゐる。かの一本の大輪の菊が王者の秋を語れば、之れは野の民の秋を示す。この野菊は群をなしてゐる方が其の特色を發揮するの都合がいゝ。

紅葉

秋の色を茶褐色と云つたのは草木の葉の色からであるが、秋も真盛となれば、楓を始めとし十數種の木の葉は紅葉して、殆んど赤に近い色となる。そこに紅葉の趣味が起る。秋の紅葉は、初夏の新緑と相待つて、自然の色の趣味として双壁である。新緑について述べた事は多く紅葉にも當倣まる。即ち紅葉の中にもいろ／＼の色がある事、併し集合して一團となつた時に最もその美を發揮する事、其の美は主として色にある事、雨に濡れて益々いゝ事、などは全く同じである。

色の性質は全然反對で、新緑は沈靜の色であるが紅葉は興奮の色である。而して新緑は沈靜の内に活動が潜んでゐるが、紅葉は興奮の内にも落付いた意味が含まれてゐる。併しいづれにしても紅葉の趣味は、秋の趣味として主なるものであるばかりでなく、自然の趣味としても四季を通じて最も代表的のものである。

(大正九、六、新稿)

冬の趣味

冬は色にして云へば灰色である。其の灰色の趣味を最もよく發揮するのは、雪空である。同じく曇りの空でも、梅雨季の雨もよひと冬の雪もよひとは餘程感じが違ふ。殊に既に地上に雪が積もつてゐる場合には、雪の色との對比の上から藍を含んで一層特色ある灰色を呈する。

さて冬の自然の趣味としては、雪と時雨と落葉と枯林とを擧げねばなるまい。

雪と時雨

雪は冬の趣味としては最も主なるものであるのみならず四季中の趣味として、最も

特色あるもの、一つである。雪もよひの空の色については、冒頭に一寸述べたが、その色は山や建物や森や林などの背景として、一種の特色を持つてゐる。それから愈々降りだすと、粉雪と大きい雪との差はあるが、音もなくしん／＼と降る趣は雨とは餘程違ふ。さうして暫く経てば、地上は勿論、屋根と云はず、木といはず、一面に蓋うて、所謂銀世界と化するのである。斯うなると、すべてが白の一色に統一されて、非常な美觀を呈する。殊に雪のあとは、多くからりと霽れるので、その一面に積つた雪が日に映えて、一層の美觀を呈する。

積雪の美は、地上のすべてのものを蓋うて一色とする所にあるが、更らに細く見ると、これによつて美化されるものは、第一に山である。富士山の如きは、固より形の美しい山であるが、其の雪の姿は一層美しい。その他の山、連山、何れも積雪によつて美しく、一部分積つた場合も中々いゝものである。樹木も枝や葉に積つた雪に趣を増し、屋根なども殊に美しくなる。谷も雪にうもれて美しく、日本アルプ

スの大雪溪の如きは殊に有名である。海や川や湖の水は雪にうもれる事も少いが、その岸に積つた景色は中々いゝ。橋などは殊に美しい風情がある。而して之等の雪景色は、外に出てみるのも勿論いゝが、部屋の内になつてみるもよく、所謂雪見酒、鍋など、舌の趣味にも間接に影響する。又ストーヴや爐邊の團樂は、雪夜に於いて殊に趣を深うするものである。

雨の趣味は、既に「春雨」と「五月雨」とについて述べたが、冬の「時雨」には又多少異つた趣味がある。春雨は何となく穏やかな暖い又艶つほい趣を含むが、時雨は淋しく、冷い感じがする、春雨は京の舞妓に適し、時雨は柳橋の年増藝妓に應はしい。

落葉と枯林

秋は紅葉の趣味を説いたが、その紅葉も晩秋から初冬に涉つて枝を離れ、茲に落葉と枯林の趣味が生ずる。落葉と枯林、共に淋しくて禪味がある。深い山の中や森の中の落葉は云ふまでもないが、落葉の趣味は、一坪の庭の一本の木にも窺はれる。

一葉落ちて天下の秋を知ると云ふが、一つの落葉にも晩秋から初冬の趣味が味はれる。林間に紅葉を焚いて酒を温めるといふのも落葉の趣味であつて、同時に枯木の趣味である。

枯木の方は、一坪の庭で其の趣味を窺ふといふ事は出来ないが、武蔵野の雑木林にも其の趣味は味へる。更らに地方に赴けば、枯木の趣は到る處に見る事が出来る。其の新緑から紅葉の時を思へば、轉た老人が青春の日を想ふ心持がある。枯木に時雨がふれば、一層淋しく、禪味を増して来る。枯木は老人の趣味であるが、自然の趣味として他にない特色を持つてゐる。

(大正九、七、新稿)

冬の住宅の趣味

住宅に限らず一般に建築は、春夏秋冬の季節によつて、衣食のやうに變へる事が出来ないものである。而して四季によつて變化のない丈け、それだけ人間の生活を

常に一樣に支配し、日常の趣味の根柢をなすものである。この事は既に前項「夏の衣食住の趣味」に於いて述べたから、今「冬の住宅の趣味」を説くに當つて再び繰返さないが、然らば既に夏の住宅を説いた上は、冬の住宅について云ふ事が無いかと云ふのに、さうでもない。住宅と冬とを結びつけた所に、幾多趣味上の問題があるのである。

冬向の家

まづ最も特殊の場合として、冬向の別荘を建てる事がないでもあるまい。老いたる両親なり祖父母をして、暖い冬を過さしむる爲めに、冬向の別荘を建てる事は、富豪としては雑作もない事である。さう云ふ場合に第一の必要條件は、暖い土地の暖い向むきを選ぶ事である。東京附近ならば、例へば熱海のやうな極く暖い所を選び、その暖い土地に暖い向を選んで建てるのである。さうして外觀から冬向にしたいと思ふが、それには日本風なら藁葺などがよく、西洋風なら赤い色の瓦葺で、壁は皮つ

きの荒削りの木で校倉式かせぐらしきに井籠組せいろうぐみでやつて見たい。校倉式の建築は北歐邊の寒國に行はれてゐるが、それが寒國に應はしいと同時に、我が國でも冬向の家には面白いと思ふ。これは住宅ではないが近頃中禪寺湖畔に建てられた郵便局は、寫真で見ると校倉式で頗る面白く、後ろの山に雪でも降つた時は非常にいゝだらうと思ふ。外觀はそれとして、内部は間取りも設備も無論暖いやうにするのであるが、さうなると、冬向の別荘でなくても、冬向の部屋にも同じ條件が必要である。

冬向の部屋

冬向の部屋といふ事になると、それは老人でもある家には必ず必要で、新しく住宅を建てる場合に、老人があれば、必ず考に入れねばならぬ事である。而して普通の住宅の一室を冬向にするのであるから、大して面倒な事でもない。中流の人ならやれる事である。

冬向の部屋は、完全にするには煉瓦造が第一であらう。而して煉瓦造であれば、

西洋風になるのも致し方あるまいが、そこが建築家の腕にたのみたい所である。煉瓦を使用して、在來の西洋風でなしに建てる事は出来ないものであらうか。冬向きの部屋一つ位は試みとしてもやつて貰ひたいものである。やつてみて案外面白く出来れば、次には一軒の家の全部が煉瓦を用ひて日本風——必しも在來の日本風でなくていい、其の建築家自身の創造になる新式で結構である——で出来る譯で、この小さな所から、日本建築の將來といふ大問題が、具體的に解決出来ないとも限らないのである。

併し在來のやり方から云へば、煉瓦造ならば西洋風になる事になるであらう。西洋間ならば、一坪位の四角の出張りを南と他の一方にとり、南の方のは三方をガラス張りの窓として、日中の休み場所とし、他の一方は特に天井を低めて洞ほらのやうにし、奥にストーブを装置して、夜の休み場所としたい。前者には三方の壁につけて腰掛を作り、後者には兩側面丈け壁につけて腰掛を作るのである。

日本の地勢として、南北に長く、冬でも暖い地方もあれば、冬の半分は雪に埋もれてゐるやうな寒い地方もあるのであるから、寒い方は前述の如く、煉瓦造が最もいゝが、東京地方から南へかけては、木造でも澤山である。木造で縁側にガラス戸を装置し、床を隙間なく張り、畳下に紙でも敷けば十分である。さうして採温には、普通火鉢でよからうし、部屋によつては、爐を切れば猶いゝ。公共建築としては、暖い空気を送るのが最も理想的であり、さもなくば蒸氣暖房装置がいゝのであるが、住宅としては、大きい火鉢を圍むなり、爐邊を繞るなり、或はストーヴの周りを圍むなり、何れにしても赤い火を中心として團欒する事が、趣味として必要である。それには暖い空気を送つたり、鐵管で蒸氣を通じては駄目である。

冬の裝飾

壁の色は濃い茶とか蝦茶とか温い色とし、家具もこれに應はしく、白つばいものはよくない。オークの白ラック塗のものや、竹や籐のものは夏向であつて、冬向で

ない。障子の多い部屋も冬向でなく、冬は襖と壁の方が應はしい。屏風、衝立にも夏向のものもあるが、これらは寧ろ冬向の家具である。床の間と違棚との裝飾は、無論冬向のものに換へねばならぬ。軸には青緑山水、濃厚な花鳥畫も應はしいであらうし、花瓶、香爐、置物等、夏は多少省いたものも冬は持出した方が却つてよからう。室内の家具の數は、夏は成るべく少く、冬は少し豊富に、併し軒端の釣葱、岐阜提灯などは、無論夏あつて冬なかるべきものである。座蒲團、茶道具、菓子器、更らに食器、酒器なども皆冬らしいものにしたがひたい。客も主人も冬の装ひをしてゐる時に、家具、調度が夏の装ひをしてゐては不調和である。冬に團扇を出したら誰も本氣の沙汰とは思ふまいが、團扇でなくて、團扇のやうな調度を出される場合がある、心すべき事である。活花と盆栽とは、自然を材料としたものであるから、冬は冬のものしかないので不調和の心配はないやうなものゝ、活け方などには冬の心持が必要である。温室の草花も、西洋風の室などには應はしい。(大正五、一二、趣味之友)

趣味教育に就いて

一般の趣味教育に就いて少しく述べて見ませう。趣味教育は廣く社會一般の大問題であります。さて趣味教育にしても、美術教育にしても、先づ第一に教育といふ意義から定めてかゝらなければならぬと思ひますが、さうなると中々難しくなり、又長くなつて困ります（文科大學の専攻學科の一つとして、教育學がある位です）から、茲ではそれほど根本迄考へずに、教育といふ事は、本書の「趣味講壇」の最初の項に書いた位の事で、ほゞ解つたものとして話を進めます。

趣味が、舌で味ふ味覺の趣味から、眼と耳で味ふ視聽覺の趣味に進歩し、その視聽覺の趣味の内、更に洗練され、教育されて發達することは、一通り前に述べました。（「趣味講壇第一項、趣味の意義」参照）。

一般に教育といふことには、其の理想、精神といふことゝ、其の理想、精神を實現せしむべき教育者が必要であつて、其の教育者は必ずしも人に限らない、多くの場合は人を主としてゐますが、必ず人以外のものを伴つてゐます。而して人は一人の場合も多人數の場合もあり、多人數の場合は、其處に組織が必要となつて來ます。又教育されるものも一人々々の場合と多人數集合してゐる場合とあつて、多人數の場合には、其處に組織が必要になつて來ます。又教育すべき事柄も、單純に一つの場合と、複雑して多種ある場合があり、複雑の場合には、其處にまた組織が必要となつてきます。而して之等の多くの組織が集まつて、其處に制度を設けねばならぬ事になるのであります。これを教育制度と云ひ、我が國では、普通教育、高等普通教育、高等専門教育、大學教育と分け、小學校、中學校、高等女學校、各種の高等専門學校、大學を以つてこれに宛てゝゐます。

學校以外の教育

趣味教育に就いて

併しその所謂教育制度といふのは、学校教育に過ぎないので、教育は決して学校のみに施されるものではありません。否、学校で施される教育といふものは、教育の極く一小部分に過ぎないのであります。美術学校なども美術教育に對しては決して大した効果あるものではありません、美術学校の卒業生だから、その美術的精神なり技倆なりが、美術学校許りで出来たと思つては大間違ひです。然らば学校教育以外にどう云ふ教育があるかと云ふに、第一に胎教があります、第二に家庭教育があります、第三に社會教育があります。此の第一は母の胎内にゐる十ヶ月の間に過ぎませんが、これを廣く考へると、遺傳といふ事に及び、親から祖先まで遡つてゆきますから、年月から云ふと非常に長い事となります。次に家庭教育は生れてから學校にゆく迄は勿論、學校にゆく様になつてからも、多くは家庭から通ふので、大部分は家庭教育を受ける事となり、學校が終ると又家庭に（勿論前には子として後には夫として、又妻として、或は親として）歸つて來ますから、家庭教育は生れ

てから死ぬ迄続きます。第三の社會教育も生れてから死ぬ迄、学校教育の有無に拘らず、家庭教育と併行して脱する事が出来ません。

而して趣味教育は、その何れに含まれるかといふに、すべてに涉つて含まれてゐます。即ち遺傳、胎教、家庭教育、學校教育、社會教育のすべてに涉つて、趣味教育が含まれてゐるのであります。これから順々に説明してゆきませう。

趣味と遺傳

父祖の體質が其の子孫に遺傳する事は、疑ふべからざる事實であります、遺傳するのは單に體質のみならず、其の精神的方面にも及ぶ事が、事實によつて證明されます。西洋の諺に、「大藝術家は三代かゝらねば出来ぬ」とか「紳士を作るには三代かゝる」とかいふのは、何れも遺傳が精神的方面にも大關係のある事を示すもので、實際に名人の系統を調べてみると、よく精神的方面で、親や祖父母の遺傳のある事がわかり、趣味も精神的方面の一つとして遺傳から脱れる事が出来ません。勿

論例外がないでもありませんが、所謂大藝術家とか、名人とか云はれる者の系統を調べてみると、必ず其處に何等かの因縁、即ち遺傳のある事が多い。この實例は、調べて見れば具體的に數多の例證を擧げ得る事と思ひますが、手近い例で、私自身を考へてみましても、私の父は陸軍々人で、一見私とはまるで趣味が違ふやうであります。左様ではありません。父は若い時分から繪が好きで、一時はよく文人畫を描いてゐました。従つて勿論觀る事も好きであります。又木の盆を彫つたり、印を彫つたりする事も好きです。つまりこれらの趣味は明かに私に遺傳してゐると云ふ事が出来ます。また上田萬年氏は伯父さんの趣味に養はれたと云はれましたし、黒田清輝子も御父さんや伯父さんの趣味を傳へて居られると、自ら話された事があります。

趣味は遺傳するものでありますが、これは當人となつてはどうする事も出来ません。自分の親や祖先の趣味が低いと云つても、遡つて之れを教育する事は出来ませ

ん。どうしても因縁とあきらめるより外はありません。唯自分が、親として又祖父母として、子なり孫なりに遺傳を與へるのを思ふと、自分の趣味を高めるといふ事が、單に自分の爲めのみでなく、子や孫の爲めである事がわかります。即ち我々は大酒や不品行を、子孫の爲めに慎まねばならぬと同様に、趣味に於いても子孫の爲めに、自ら教育し修養する必要がある譯であります。

趣味と胎教

遺傳は祖先來の事であり、時日に於いて長いのですが、其影響は比較的間接たるを免れぬ。それが胎教になると、既に母の胎内に宿つてゐるので、餘程關係が密接になつて來ます。即ち遺傳の場合、教育者が祖先であつて、教育者と云ふ名も穩當でありませんが、胎教になると、教育者は母であつて、被教育者は胎兒である事が明かであります。

然らば教育者たる母は、被教育者たる胎兒に對して、何う云ふ風に趣味教育を施

すかと云ひますのに、これも遺傳よりは比較的關係が密接であると云つても、要するに胎内の子でありますから、間接たるを免れません、即ち教育も直接には母を教育する外仕方がありません。勿論母の趣味の遺傳は別にあるのですが、特に胎内にある十ヶ月間の母に對する教育が、胎兒に影響を與へるのであります。即ちまづ母の部屋としては、最も氣持よき部屋を選び、其の裝飾には、穏やかな調子を基として、或は繪などを懸け、音樂の出来る人なら時々之れを試みるのがよろしい。併し芝居や音樂會などは、其の狂言番組によつて避けた方がいゝかと思ひます。それよりも自然の美に親しませた方がよく、それも騒々しい花見などよりも、靜かな郊外散歩を勧めたく、又展覽會なども、文展みたい騒々しいものでなければ、極くいゝと思ひます。讀書も美術音樂に關したものの、上品な小説などが、趣味の胎教としては適當してゐます。猶活花や茶の心得のある人ならば、これらを試みる事も悪くない、要するに穏やかな趣味生活を送る事が肝腎だと思ひます。

三四歳までの趣味教育

さて十ヶ月の胎教も終つて、愈々生れると、家庭教育と社會教育とが始まるのですが、始めは、社會教育の方は比較的交渉がなく、まづ家庭教育で九分九厘を占めると云つて差支ありません。生れてから三四歳まで、まだ獨りで遊ばず、専ら母や父、其他の人の手に抱かれて、遊ばせて貰ふ時代から話を始めませう。

扱て生れてから三四歳迄の小兒の趣味教育に當る教育家は、云ふまでもなく其の母が主で、父も多少はこれに當り、兄弟のある場合には兄弟がこれに與かり、子守といふやうな者の加はる事もあります。此の時分に注意すべきものは、まづ第一に着せるものでありますが、無論男の子と、女の子とで違ひますが、大體に於いて大柄な、色も強いものが似合ひます。そしてその色がまづ小兒の視覺を刺戟して、眼の趣味に關する最初の教育となるのであります。第二には子守歌を聴かす事、これは肉聲でも、オルガンなどに合せても、まづ小兒の聽覺を刺戟し、耳の趣味の最初

の教育となるのであります。第三には玩具ですが、これの選擇にも趣味といふ事を考に入れて欲しいと思ひます。同じ人形を買ふにしても、形や色を選ぶ事が肝腎です。而して第一の着物とか第三の玩具などは、小兒に對しては一種の教育者であつて、前に人以外の教育者があると云つたのはこれです。しかもこの人以外の教育者が、此の時期では着物や玩具ぐらゐりますが、漸次成長するにつれて、非常に多くなり、社會教育に於ける教育者は、人よりも却つて人以外の者の方が多い位であります。第四は遊ばせる仕方で、これは趣味の「味ふ」といふ方面でなしに、「作る」といふ方面に深い關係を有し、即ち藝術で云へば鑑賞の側でなしに、製作の側に關して、第一歩の教育となるので、聲を出す音樂とか、體を使ふ劇とか能とか、舞蹈とか、また手を使ふ造形美術に對しては、此の遊ばせ方が關係を及ぼすだらうと思ひます。

幼稚園時代の趣味教育

四五歳以上になると、もう獨りで遊ぶやうになり、或る者は幼稚園に入ります。茲に一種の學校教育が始まる譯ですが、七八歳になつて小學校に入るまでは、まづ引つゞいて家庭教育が九分九厘を占める時期であります。幼稚園については議論もあるやうですが、幼稚園を選びさへすれば、結構だと思ひます。勿論家庭で十分行届く事が出来るなら、強ひて幼稚園に入れる必要はありません。

さて此の時分になつても、着物は前から引續いた一事項ですが、單純な色の洋服がいゝやうです。運動によく、趣味の上からも日本服より却つていゝかと思ひます。それから若し別に小兒室が設けられる場合には、其の部屋の裝飾には、特に意を用ひて欲しいと思ひます。始めから小兒室として建築する場合は勿論、假に一室を小兒に充てがふ場合にも、小兒の趣味を教育するには、特別の注意が要ります。

次に此の時期から、小兒には遊戯の裏に、趣味の「作る」方面、即ち藝術の製作的方面が非常に發展するものであります。例へば積木で家の形を作つたり、紙で人形

を作つたり、繪を描いたり、唱歌を唄つたり、飯事をしたりしますが、それが即ち建築、彫刻、繪畫、音樂、演劇等の製作に吻合するのであります。如何なる人も此の時代には小建築家であり、小彫刻家であり、小書家であり、小音樂家であり、小俳優であります。而して何人もその儘繼續して成人すれば、皆美術家となり音樂家となつて了ふ筈です。その位ですから趣味教育に於いては、此時期が最も重要な時期の一つであります。何故此の時期の小兒が、斯く製作方面に熱中するかと云ひますと、第一には模倣力が強いからで、何んでも一寸見るとすぐ眞似たがる位です。第二には想像力が強い事で、とても大人にはわからない事を想像し、擬人なども本氣になつてやるものです。第三には活動力に富んでゐること。この模倣力とか想像力とか活動力といふ事は、皆藝術の製作に最も必要な事で、模倣の如きは藝術の起源だとさへ云はれてゐます。そんな譯で製作方面に發展するのでから、其の模倣力や想像力や活動力の強いのを利用して、いゝ方に導けば、趣味の「作る」方面に對

する教育は十分施す事が出来るのであります。俳優の子が、初舞臺に出るのは、大抵この時期のやうです。

で此の時期は製作の時期で、鑑賞の方にはまだ早いと思ひます。即ち展覽會や芝居や音樂會につれてゆく事は、まだ少し早いだらうと思ひます。勿論それらのものを觀せると模倣の材料にはなりますが、それ程にして模倣の材料を與へる必要はないのであります。それより自然に親しませた方がいゝと思ひます。

此の時期も教育の任に當る者は、母親を第一とし、第二が父親、それから兄や姉、女中等で、幼稚園に於いては、云ふ迄もなく嫁母であります。

猶此の時分迄に我が國の風俗習慣の上から趣味教育に關する二三の事柄を述べて置きませう。まづ第一には節句であります、男なら五月五日の端午の節句、女なら三月三日の雛の節句。共に生れてから始めての初節句から毎年ある事で、元來趣味の深いものでありますから、趣味教育の好材料となり、好機會であるので、これを

巧く利用するやうに心がけねばなりません。

次には七五三の祝です。これも趣味教育の一機會と見る事が出来ます、男の五歳、女の三歳と七歳、何れも新しく祝着を作つて氏神に詣り、歸つては祝の宴を開くのですが、此の祝着が趣味教育の材料となるので、其の意匠の選擇には、親たるものはよく注意せねばなりません。注意といふのは、決して高い金をかけて、いゝものを買へと云ふではありません。材料は悪くとも、模様や色彩のいゝのを選べといふのです。殊に女の七歳位になると、もう自分の着物の美しいのを誇る心もありますから一層注意が肝腎です。

小學時代の趣味教育

次に七八歳から十二三歳まで、即ち小學校時代になると學校教育が大分入つて來ます。併し猶此の時期にも、主たるものは寧ろ家庭教育で、小學校へ入つたからと云つて、急に親が子供に注意を拂はなくなるのは大間違です。考へても御覽なさい、

小學校にゐる時間は、一日たつた五六時間ではありませんか、十時間寝るとしても、八九時間は家庭に居る時間で、却つて學校よりも多いのです。おまけに日曜日は休みです。又此の時分からは多少社會教育も加はつて來ます。まづ家庭五分、小學校四分、社會一分と云つた位の比例になるでせう。併しともかく學校教育の第一歩に入つたのですから、小學校の方から述べませう。

小學校に於ける趣味教育としては、第一に其の校舎及び設備に、趣味を豊かにして欲しいと思ひますが、遺憾の事には、まだ此の方面までは、仲々手が及ばないやうであります。バラック同然の校舎では、とても趣味を養ふ事は出来ません。せめて教室や廊下の壁には、額一枚でも懸け、隅には植木の鉢も置いたら、兒童の心持はずつと違ふだらうと思ひます。無論小兒は意識的に趣味を味ふ事はないでせうが、無意識の裏に趣味を感じるのです。校舎のペンキの色などもさうであります。同じ塗るなら氣持のいゝ色で塗つて欲しいと思ひます。それから掛圖なども成るべ

くいゝものを澤山備へ、樂器もオルガンの外にピアノがあれば猶結構です。又校庭の一部に草花を植ゑる事なども、大に勧めたいと思ひます。

次には教師と其の教へ方、及び教科書であります。教師に趣味がなければ駄目です。趣味ある教師が、趣味教育の必要を知つてゐて、趣味ある教へ方をしなければいけません。それから教科書ですが、現在の國定教科書に、果してどれだけ趣味の分子が加へられてゐるか、甚だ疑問だと思ひます。それらの事は、親しく小學校に行つて、授業を參觀し、教科書も一々調べてみなければ、具體的に委しい事も云へませんから、今はよしますが、他日機會を得て必ず試みて見たいと思つてゐます。

遊戯の裏に、趣味の「作る」方面が發展する事は、此の時期には少しく衰へるやうですが、猶繼續してゐますから、此の方面の利用を忘れてはいけません。それから「味ふ」方面、即ち藝術の鑑賞の方面も、此の時期には、ぼつ／＼始めてよからうと思ひます。即ち展覽會や音樂會につれてゆく事は必要で、芝居も狂言によつて

は、趣味教育になります。活動寫真も映畫によつては、結構です。同じく味ふ方面で、自然は大なる趣味教育家であります。山水の景色を始め、草木の花に親しませるやう、旅行なり散歩なり、或は自宅の庭に草花を作るなりする事が、最も穩やかな自然の趣味教育の方法です。

次に雜誌類も趣味教育に關係する事が少くありませんから、よく選擇して、其上見たり讀んだりする際に注意を與へねばなりません。少年少女向の雜誌は、随分澤山發行されてゐますから、其の内で、趣味教育に最もためになるのを選びたいと思ひます。

此の小學校時代の趣味教育に當る者は、學校の教師を始めとし、家庭にあつては兩親、兄弟、それから友達も御互に教育し合ふ事になりますから注意せねばなりません。其の他には展覽會、音樂會、芝居其他の娛樂物、それから自然、雜誌、其の他あらゆる周圍が皆趣味教育を與へる事になるので、油断はなりません。ま

た両親や兄弟や教師などの趣味も、感化の源となりますから、子供や弟妹や兒童の爲めに、両親たり兄弟たり教師たるものは高い趣味を持たねばなりません。

中學校時代の趣味教育

次には十三四歳から十八九歳迄の時期、即ち男ならば中學時代、女ならば高等女學校時代ですが、もう此の位になると、男女兩性の差違が著しくなつて來、従つて趣味教育にも多少の差違をせねばなりません。勿論共同の點も多いのですが、今は解りいゝやうに區別して書いてみようと思ひます。現在我が國では學校教育としては、中學校と高等女學校と分かれて居ますから、その方が都合がよいのです。併し私は理想からいへば、混合教育に賛成です。家庭でも社會でも、男女を區別しないと同様に、學校も兩者を一緒にした方が害少くして、利が多いと思ひます。殊に趣味教育、感情教育といふ方面からは、混合教育が利あつて害なきものと信じます。さて此の時期に於いても、家庭教育は猶輕視する事が出来ません。趣味といふ方

面に甚だ缺けてゐる現在の中學教育を受けてゐる子供には、家庭教育は非常に重大な役目を持つてゐます。又社會と接する事も、小學時代よりは多くなつて來るので、社會教育も重要な度を高めて來ます。知育としては兎に角、趣味教育としては、家庭が四分、學校が四分、社會が二分と云ふ位の比例だと思ひます。

先づ學校から述べてみますと、小學校と同じく第一は校舎であります、第二はその設備であります。校舎、及び設備とも今の中學校は、バラック同様の校舎で、甚だ趣味に缺けてゐます。第三は學科の按配ですが、これも圖書と、音樂の二科はあつても、それが甚だ輕視されてゐるのは、圖書の先生が最も馬鹿にされてゐる事です。倫理とか經濟とか法律等の大意が述べられるならば、美的趣味の大意はどうしても講せられなければなりません。實際に於いて、倫理や經濟や法律よりも、美的趣味の講義の方が教育として効力があるに違ひありません。又特に美的趣味の科目を設けなくても、あらゆる學科の内に、趣味を含ませて欲しいと思ひます。

いかなる學科にも、趣味のないものは無いのですから、教師の教へ方により、教科書の編纂し方により、趣味は常に鼓吹され得るのであります。教科書と云へば、必ずしも内容のみならず、書物そのもの、装幀にも、趣味は加へられるのです。教師の教へ方は無論の事ですが、それには矢張教師の趣味を高めねばなりません。それから生徒としての服装、即ち制服、帽子などにも、趣味の念を加へて欲しいと思ひます。それは必しもいゝ地を選べといふのでなしに、主として形と色などに就いて云ふのであります。

猶學科としては、體操も、身體を美的にする考を含ますときに、趣味教育に重大な關係を持ちます。これは身體の柔軟な小學校時代に殊に注意すべく、中學校でも猶有効であり、女學校では、中學校よりはすつと重要なものであります。

學校はその位として置いて、社會教育としては、文學、美術、音樂、演劇などが、趣味教育の重要な材料であります。文學は書籍、雜誌、新聞によつて味ふので、味

ふ事が必要であると同時に、選擇が非常に肝腎です。自ら作る方は、特に獎勵する必要もありませんし、作る方に入ると、専門的に傾き易くなりますから、一般としては味ふだけで澤山です。美術は主として展覽會で味ふので、また多少は書籍、雜誌で味へます、それも繪を描く事など、中學校にもありますが、多少はやらせた方がいゝと思ひます。音樂は主として音樂會に行つて味ふのですが、この方は自らやる必要もないかと思ひます。併し一寸オルガン位は弾けるやうに、又聲樂の心得もあるに越した事はありません。和洋何れを優つたとは云へませんが、味ふとしては兩方を兼ねたいと思ひます。演劇は無論味ふ方だけで、これは演劇の種類と、狂言の選擇に注意を要します。其他手輕な活動寫眞、寄席なども内容を選択した上で、可なり趣味教育になると思ひます。

自然の趣味を味ふ事は、家庭としても學校としても必要で、一ト月の中で、展覽會や音樂會に一度行つたならば、遠足や散策には二度行く位にするのが最も健全なる

方法であります。自然の趣味は必しも遠足や旅行や散策によらず、自宅でする園藝からも味ふ事が出来ます。

人間に接觸する趣味も、家庭でも學校でも社會でも得られますが、これは第一に家庭教育として、家庭に於て監督し、發達さすべきものであります。即ち兩親との間、兄妹との間、親戚との間、友人との間、召使との間、これらの間の感情を美しくしてゆく事は、趣味教育の重要な事柄だと思ひます。男の方は此の位にして女の方に移りませう。

高等女學校時代の趣味教育

十七八歳の頃は、男の方でも重要な時期ですが、女の方は一生中の一大變化が、心の上にも體の上にもある時で、従つて趣味教育又は感情教育としては最も肝要の時期であります。然るに我が國現在の高等女學校教育は、徒に技藝いたづらの末に走つたり、形式的の賢母良妻主義を叫んで、眞に根本を作るべき趣味教育、感情教育を忘れてゐるやうに見受けられます。

家庭教育の重要な事は、男より一層度が高く、社會教育は、それだけ男より度が低いかと思ひます。比例を云へば家庭が五分五厘、學校が四分、社會が一分五厘位でせうか。例によつてまづ學校から述べますと、校舎や設備は、中學校と同じ事ですが、高等女學校としては、中學校よりも一層趣味を豊かにして欲しいと思ひます。即ち中學校なら白い壁でいゝ所も、色で塗つて欲しいのであります。さう云ふと、現在の高等女學校は、随分不十分のものだらうと思ひます。

次には學科ですが、圖書、音樂、習字、體操、舞踊などが、直接趣味に關するもので、最も注意せねばなりません。圖書には寫生も必要ですが、圖案も重要で、應用としては寫生よりも圖案の方が値があるでせう。習字も女の趣味教育として、圖書と並んでやつて貰ひたいと思ひます。音樂も無論男より重要で、體操と舞踊に至つては、特に身體美を生命とする女に最も關係が深く、これを衛生の方からのみ考

へるのは浅見と云はねばなりません。

倫理とか家政とか衛生とか育児とかいふ學科もあるでせうが、それよりも美的趣味の講義が必要且つ有効で、殊に女學校としては、根本を養ふものと信じます。無い以上は仕方ありません、他の種々の學科の間に、これを入れるのです。即ち國語歴史を始め、理科でも地理でも何でも、それ等の學科の内に趣味を横溢させねばいけません。即ちあらゆる學科に於いて教師の教へ方により、教科書の編纂し方により、趣味教育を施さねばなりません。これは中學校と同様、先づ教師其の人の趣味高き事を必要とします。

次に社會教育として、文學、美術、音樂、演劇等が趣味に關係の深い事は、中學校時代の男に對するのと同様で、男よりは寧ろ多く接觸させる必要があります。何故と云ふに、娘としての時期は廿一二歳まで、それ迄に十分して置く事が一生を支配する根柢を作るので、一旦嫁した以上は、さう云ふ趣味教育を施す餘裕の少ない事が多いだらうと思ふからであります。男の方は、中學以上に猶多くの學校時代があります。女にはそれがなく、大抵高等女學校卒業後二三年で結婚するやうになりますから、高等女學校の四五年級から後は、殊にこの社會的趣味教育を盛にやらねばなりません。

これらの趣味教育を通じて注意すべき事は、男の場合と同様選擇であります。文學に於いても、美術に於いても、音樂に於いても、演劇に於いても選擇は頗る肝要で、選擇を誤ると、飛んだ悪い趣味が養はれる事になります。又それは「味ふ」方ばかりでなしに「作る」、方面も一通り心得て置きたいと思ひます。文學も小説を作る程の必要はありませんが、歌位は詠み、美術も彫刻などを作るほどでなくとも、一寸したスケッチや刺繡の圖案位は出來て欲しく、音樂はピアノなりヴァイオリンなり琴なり、又聲樂なり心得て欲しいのであります。「味ふ」方の仲間入りが出来るのも必要ですが、「作る」方が出來ると、それで家庭内の趣味を豊かにする事が出來

ます。和氣霽々たる家庭の空氣を作るには、主婦なり娘なりが、美術や音樂の「作る」方をつとめる事が肝要であります。

猶女の此の時期の趣味教育としては、點茶、生花、園藝など、云ふ事があります。茶は古い美術と關係が深いものですから、氣を付けてやれば、趣味教育としては中々深い所まで行く事が出来ます。生花も自然と繪畫とを結合したやうな所があつて、女の趣味としてはいゝものでありますが、これはあまり自然を曲げない程度にしたと思ひます。園藝は最も自然で、家庭の趣味としては、極くいゝものであります。次に女の趣味として、髪と化粧と服飾、その他裝身具、持物などは、此の時期から特に重要になつて來ます。而してこれらに關して矢張趣味教育が行はれるのですが、あまり話が細こまくなりますからやめます。これらは學校教育でなく、社會教育でもなく、専ら家庭教育が關係する事です。

又人に接觸する趣味も、主として家庭で養はるべきものです。而して此の時期の女は、所謂年頃になり、親、兄妹、同性の友人に對する感情の外に、異性に對する感情が湧く時ですから、殊に注意を要します。併しこれも趣味教育としては、無暗に抑壓する事なく、清く美しく適度に發露させねばなりません。此の點に於いて、中學校と高等女學校の混合教育を、巧くやつてゆけば最も有効だと思ふのですが、これを實行してゐない現在としては、親類や知人などの内で、男女を接近させて、異性に對する感情を清く美しく發露せしめ、だん／＼其の範圍を廣めて、良縁を求めらうにしたいと思ひます。

二十歳以上の趣味教育

二十歳以上になると、男女は益々別に述べなければなりません。男が二十四五歳乃至二十六七歳で、大學教育を終つてから、女の二十一二歳の者と結婚したとすると、それからはまた別の意味で家庭教育が起り、社會教育が最も重要になつて來ます。

で男の方は、中學校を終つてからも、或は高等學校から大學へ進み、或は各種の高等専門學校へ入るのですが、其等の學校に於ける趣味教育は、寧ろ中學校よりも重要ではありません。併し現在の高等學校や大學や各種の高等専門學校は、其の校舎なり、設備なり、趣味の上から、あれで十分だとは決して云へません。猶々趣味といふ點について改良し、施設せねばならぬ點が多々あると思ひます。併しこの二十歳から二十四五歳乃至二十六七歳までの學校生活の趣味教育は、學校以外に、主として社會や家庭から得るものであります。社會からは文學、美術、音樂、演劇等の趣味を、新聞、雜誌、展覽會、音樂會、劇場、各種の集會等によつて得るので、これには度々云ふ通り選擇が必要です。而して之等の趣味は、學校時代を終つてからも繼續して行きたいと思ひますが、それにはこの二十歳頃から二十六七歳までの學生生活の間に養ふ習慣をつけるのが最もいゝと思ひます。勿論學問の餘暇に、「趣味」方を主としてやればいゝのです。

女は高等女學校の四五年級から二十一二歳の結婚する迄が、この男の方の二十歳から二十六七歳迄の所に相當するので、前項に記した事を繼續すればいゝのです。それから結婚して家庭を作り、妻として、又聽て母としては、多少の趣の違つた趣味教育があります。

男も二十四五歳乃至二十六七歳で、學生生活を終り、聽て結婚して家庭を作り、夫として、又父としては、學生時代とは違つた趣味教育があります。併しこれらの事は他日に譲つて置きます。唯云つて置きたい事は男女とも親となつては、自己の趣味教育を忘れないと共に、自分達が小兒の趣味教育の教育家となつてゐる事を自覺せねばならぬ事です。而して前に述べた小兒の趣味教育を自分の子供達に施す事に心掛けねばなりません。

(大正五、三、趣味之友)

婦人の勢力と趣味生活

一 婦人職業の増加

今回の歐洲大戦争は、若い男子を擧げて戦場へ送つた爲めに、各種の職業に於いて、男子従業者に多大の缺陷を生じ、之れを補ふには多く婦人を以つてした。即ち婦人の職業を持つものが非常に多數に上り、勞働的の職業にさへ多くの婦人従業者を見るに至つた。先頃、三越に於いて歐洲大戦寫眞の展覽が行はれた際、英國の造兵諸工場に於いて、如何に多くの婦人が勞働に服せるかを見て驚いた人は尠くなかつたであらう。造兵工場の如きに於いて、すらすの如くであるから、其他の工場、會社等に働く職業婦人は頗る多數に違ひない。斯くの如くにして男子の職業は婦人によつて奪はれてゆく、これは社會上からみて確に「婦人の勢力」の擴張である。我が國に於いても、婦人の職業は益々多くなりつゝあるのは事實である。銀行、

會社の事務員、鐵道、貯金局の事務員、デパートメントストアの店員、電話交換手等は益々多くなる傾向であるし、勞働的の方面でも、既に電車の車掌さへも婦人を採用した地方がある位である。即ち婦人の勢力は茲に徐々擴張されつゝあるものと云はねばならぬ。

二 政治上に於ける勢力

又歐洲に於いては、婦人の選舉權を認めた國もある。これは政治上に於ける「婦人の勢力」の伸長である。我が國でも既に普通選舉の聲が高く、早晚實行されるものとすれば、次に來るのは、婦人に選舉權を與へる事であらう。若しその時が來れば、我が國の「婦人の勢力」も直接政治上に及ぶ事になるのであるが、間接には今日も及んでゐる。かの衆議院議員選舉に於ける候補者の夫人、令嬢などが、夫なり父なりの爲めに有權者を訪問したり、選舉の當日投票者を接待したりする事は、間接に「婦人の勢力」が政治上に及ぶものと云つてよからう。

三 慈善と教育と醫療

次に慈善事業に於ける「婦人の勢力」は可なり大なるものがある。我が國に於いても愛國婦人會、赤十字社、篤志看護婦人會、東京慈惠會、花の日會、櫻楓會托兒所、福田會惠愛部、其他婦人の手によつて慈善事業の行はるゝものは可なり多い。教育界に於いても「婦人の勢力」は可なり認められる。幼稚園、小學校、高等女學校に於ける教育は、主として婦人によつて成されてゐる。女子教育に對してのみならず、幼兒や兒童の教養については、多く婦人の力に待つてゐる。

又醫療の方面に於いても、「婦人の勢力」は侮る可からざるものがある。直接醫療に従事する女醫の數も漸次増加してゐるし、看護によつて間接の醫療に従事するものは、殆んど婦人のみである。又助産といふ事も婦人の職業の主なるものである。

四 家庭内に於ける勢力

猶造花其他の細工物、裁縫等の職業に於いても婦人の従業者は中々多いし、茲に擧げない職業もまだ／＼あるであらう。即ち總べてを合せたならば、全體として「婦人の勢力」の意外に大なる事がわからう。併しそれらの勢力は、總べて家庭外に於ける勢力であつて、世間的には顯著であるが、家庭内に於ける勢力は更に／＼大なるものがある。

家庭内に於ける勢力は、世間的には顯著でないが、婦人としては性質上第一に擧ぐべきもので、しかも總量に於いては、家庭外に於ける勢力よりも遙に大である。家庭外に於ける婦人の勢力は、副的のものであつて、主的のものは、家庭に於ける勢力であらねばならぬ。

之れを男子の勢力と比較して考へると、男子の勢力は、家庭外に於けるものが主的であり、總量に於いても婦人に比べては、比較にならぬ程多大である。實にこれが男女の差から起る當然の差別であつて、かの家庭外に於ける婦人の勢力は男子の勢力の蠶食とも見る事が出来るのである。従つて其處に男女の勢力の争ひが起らな

いとも云へない。現に歐洲に於ける戦争中の婦人勢力の擴張は、戦後に至つて男子の勢力の恢復と共に、其處に一つの争が起りはしないかと危ぶまれてゐる。

五 女子の分擔

併しながら猶一步を進めて考察すれば、斯くの如く男女の勢力を分けて考へるのは、正しくないかもしれない。勿論男女は生理的にも腦力にも相違はあるが、元來男女は別々に生活すべきものでない。一對の男女が一つの家庭を作る以上、男女の一對を以つて一單位とすべきである。男子だけでも完全な生活は行へないし、女子だけでも同様である。換言すれば男子だけでも、又女子だけでも、完全な人間と云ふ事は出来ない。男女相合して始めて完全な人間となり、完全な生活が出来るのである。而してその一對の男女が作る一つの單位、即ち一つの家庭が、家庭の内に於いても外に於いても種々の働きをするのであつて、其の際男子は外を分擔し、女子は内を分擔するのである。内に女子が働いてゐて、始めて男子も外に働く事が出来、外

に男子が働いてゐてこそ、女子も内に働く事が出来るのである。故に内外の區別は單に男女の分擔に過ぎないと見るべきである。

六 婦人の眞の勢力

以上の如く考へれば所謂「婦人の勢力」は、男子の分擔を女子が蠶食した結果に過ぎなくなる。或は斯う云ふと婦人は怒られるかもしれないが、若し獨身者が無いものとする、即ちすべての女子が男子と一對になつて家庭を作るとしたならば、所謂「婦人の勢力」は忽にして無くなつて了ふではないか。幸ひにして（實は不幸にして）獨身者が可なりあるので、所謂「婦人の勢力」が相當にあるのである。

而して獨身者は猶増加する傾向があるが、これは決して喜ぶべき事ではない。即ち獨身者の増加に従つて婦人の職業に従事する者が増加し、所謂「婦人の勢力」も増加するが、これも決して賀すべき事ではないと思ふ。寧ろ獨身者が減少して成るべく多くの婦人が家庭を作るならば、所謂「婦人の勢力」は減じて一向差支ない

のである。斯う云ふと益々婦人は怒られるかもしれないが、婦人の眞の勢力は、男子と共に家庭を作り、家庭の内に於いて、即ち婦人の正しき分擔すべき方面に於いて、大に發展すべき餘地があるのである。これ余がこの一文を草して大に力説せんとする所である。

七 知的生活、意的生活、及び情的生活

人間の生活には、知情意なる人間の心意の三方面に従つて知的生活と情的生活と意的生活とがある。而して知情意の三方面の適當なる調和を保つ事が人間としての理想である如く、人間の生活に於いても、知的生活と情的生活と意的生活との適當なる調和を保つ事が生活の理想である。夏目漱石氏の「草枕」の冒頭にある通り「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮窟であつて、何れに傾いてもいけない。然るに元來男子は知と意とに強く女子は情に強い。故に男子だけの生活は知と意とに傾き、女子のみの生活は情に走り易い。併し何れも特長であるか

ら、之れを無闇に抑壓する必要はない。否、この特長をうまく發揮させる方がよいのである。唯人間の生活として偏するのはよくない。そこで男女の一對が一つの家庭を作ると、知情意が適當に調和されて、男子は知と意、女子は情と、各々特長を發揮して、しかも全體としてはよく調和した生活が出来るのである。即ち男女の一對が一つの家庭を作つた場合、男子は家庭の外に於いて知的生活と意的生活をなし、女子は内に於いて情的生活をなし、兩者分擔して働くべきである。

然らば茲に云ふ情的生活とは、どんな生活であるかと云ふに、これが又二つに分れ、道德的方面から云へば、愛の生活であり、美的方面から云へば趣味の生活である。前者は夫を始めとし子供、召使、動物に至るまでを愛する事である。後者に就いては次に述べよう。

八 趣味生活

趣味生活とは、一口に云へば、洗練されたる趣味の十分にある生活の事である、

唯趣味があるだけでは足りない、ある上に其の趣味が洗練されてゐなければならぬ。猶委しく説明すると際限もないから、主な點について述べると、先づ第一は住に關する事である。これには男子の知や意の領分も大分あるが、女子の立入る領分も多い。住宅と庭園の位置や設計は大體男子の考による事が多いが、細い所は女子の趣味によつていふ。殊に家具や裝飾の方面には、女の領分が大分ある。置物や棚や火鉢や座蒲團、それから生花、盆栽、園藝などの事は、すべて趣味の領分である。一坪の地所にでも、草花を作つて時々切花を一輪生に挿しかへるが如きは女子の仕事である。しかもその時々變へる一輪の花が、如何にその室の空氣を柔らかにし、生活を愉快にするであらうか。

第二には食であるが、これは趣味の原始的意味に關係する事で、殊に女子の領分に屬する事である。食物の味の取り合せ、變化、見たところの感じ、食器との調和、すべて趣味生活の主な一部をなすことである。食器から關聯して家具、裝飾に及ぶ

ので、そこに食と住との離すべからざる關係がある。實際ものを美味しく食べるのは、味のいゝ食物を要するのは勿論であるが、食器から食器以外の家具、その部屋及び裝飾までもいゝものを調和よく調へなければならぬ、それは趣味生活の主な一部で女子の最も力を要する所である。

第三には衣である。これは女子の着るものは勿論、男子の着るものも、子供達の着るものも、すべて趣味生活の領分である。趣味生活としては、何も價の高いもの許りをよいとしない、主として色彩と模様との洗練されたものがよく、又似而非なる質のものがよくない。例へば縮緬や絹ならよいが、縮緬らしく見せたものや絹らしく見せたものはよくない。夫れよりも却つてモスリンなり木綿の方がよい。又着物に附隨して色々の服飾品がある。

以上趣味生活を衣食住に分けて述べたが、感覺の方からわけると、眼（視覺）の趣味と、舌（味覺）の趣味と、皮膚（觸覺）の趣味と云ふ事になり。即ち住は眼の

趣味、食は舌の趣味、衣は眼と皮膚の趣味である。

猶耳（聴覺）の趣味は、音楽であつて、これも趣味生活には重要な部分である。音楽のない家庭は甚だ淋しい、晚餐の後夫人なり令嬢なりが奏する音楽は、ピアノでもヴァイオリンでも琴でも、如何に家庭を愉快にするであらう。或は蓄音機でも、レコードを選べば可なりの効果が得られる。

九 結

論

趣味生活の事は、猶書けばいくらでもあるが、大要は以上述べたのでわからう。これが多くの女子の働きによつて得られるのであるから、若し此の方面から婦人を取り去つたならば、趣味生活の大半は失はれる事となり、知と意との生活に依つて、この世の中は固く、冷く、殺風景になつて了ふ。これ「婦人の勢力」として大なる領分のある事を示すものではなからうか。而して此の「婦人の勢力」は家庭の人となつて始めて十分實現が出来るもので、始めに述べた獨身者でなければ出来な

のとは、全く違ふのである。尤も始め述べた内でも、慈善事業の如きは、獨身者でなくとも出来るが、これは矢張情的に屬し、女子の特長を利用したものである。

で要するに、余は一方に於いて情的生活に於ける「婦人の勢力」を認め、同時に一方に於いて家庭の内に於ける婦人の勢力を尊重せんとする者であつて、かの知的生活や、意志的生活に於ける、又家庭外の生活に於ける「婦人の勢力」は、特別の場合を除いては、寧ろ其の擴張に反對せんとする者である。（大正八、四、婦人畫報）

日本建築の本流と支流

緒

言

日本建築の本流支流と云ふ題を見る人は、必ず様式上の觀察だと思ふであらう。本流の様式と支流の様式に關する事と思ふであらう。併し茲に余が述べんとするの

は様式の事でなくて、種類に關してである。

日本建築の様式は、細く分ければ、或は飛鳥式とか或は天平式とか、又弘仁式、藤原式、鎌倉式、桃山式、江戸式と色々挙げる事は出来るが、それらは主として細部の手法の相違から云ふので、大きく見れば、國初以來明治に至る迄、唯一つの日本式といふ名で蔽ふ事が出来る。西洋に於ける希臘式、羅馬式、復興式、ゴシック式といふのに對しては、日本式と云へば澤山で、飛鳥式と桃山式とを見ても、天平式と江戸式とを比べてみても、希臘式と羅馬式、復興式とゴシック式と云ふやうな著しい差は無い。復興式と云つても、伊太利の初期のものと、佛蘭西のものと、獨逸のものと皆違つてゐる。其の相違位が、日本式の内にもあるのに過ぎない。否な其の日本式も東洋式の一支流に過ぎないのである。尤も美術的價值から云へば、東洋の一支流に過ぎない日本式の建築も、東洋諸國の建築に比べて、將又西洋に於ける各式と比べても、十分其の特色を誇り得るものである。

兎に角、様式としては、日本建築は日本式、即ち木造楣式を以つて上下二千年を貫いてゐるのである。が今は始めに斷つた如く、様式の事を彼之云ふのではない。種類について述べんとするのである。

概 観

様式からは木造楣式一點張の日本建築も、種類から見ると、可なり多くの種類に區別され、それが時代によつて、消長してゐる。まづ種類の名目を挙げると、神社建築、宮殿建築、佛教建築、儒教建築、基督教建築、廟建築、城廓建築、住宅建築、茶室建築、庭園建築、墳墓建築、公共建築、商店建築等があり、其の内質量とも主なもの、神社建築、佛教建築、住宅建築等の三つであつて、この三つは各々分けて考へる必要がある。即ち神社建築は上世、中世、近世。佛教建築は、南都佛教、密教、淨土教、禪宗。住宅建築は、寢殿造、武家造、書院造と分けられる。而してこれらの一つ宛が前に掲げた種類に當る値があるのだから、日本建築の種類は結局

次の如く二十以上を数へる事が出来る。

上世神社、中世神社、近世神社、宮殿、南都佛教、密教、浄土教、禪宗、儒教、基督教、廟、城廓、寢殿造、武家造、書院造、茶室、庭園、墳墓、公共、商店、本籍は、以上各種の建築の消長を時代によつて観察しやうとするのであるが、其の前にまづ表示して一般を示すとしやう。

- 原始時代 宮殿 上世神社 墳墓
- 飛鳥時代 宮殿 南都佛教 上世神社
- 奈良時代 宮殿 南都佛教
- 弘仁時代 宮殿 密教 中世神社
- 藤原時代 浄土教 中世神社 寢殿造
- 鎌倉時代 禪宗 武家造
- 室町時代 禪宗 近世神社

- 桃山時代 城廓 書院造 近世神社 茶室
- 江戸時代 廟 書院造 儒教 公共
- 明治時代 公共 商店 住宅

原始時代

まづ第一に原始時代であるが、此の時代は全く美術の原始時代であつて、建築の如きも、ほんの起源を示すに過ぎない。即ち其の最も初めは、所謂天地根元宮造と稱し、まるで小舎同然のものである。而して神社と宮殿とが分離せず、又住宅の内に祖先が祀られた。かの神武天皇が橿原に即位せられ、宮殿を建築された際も、未だ神社は別になく、宮殿即神社であつた。後に崇神天皇の頃から、宮殿と神社とが分離し、茲に宮殿建築と神社建築とが獨立して生じた。而して原始時代に於ける主なる建築は、實に宮殿と神社とであつたのである。當時の宮殿は、どんな建築であつたか、よくはわからないが、雄略天皇の時樓閣を建てた事が記録に見えてゐるか

ら、相當に立派のもので、無論當時の建築界の覇者であつたらうと思はれる。

神社建築は、當時の宮殿建築がよくわからないのに反して、明かに推察が出来る。と云ふのは外でもない。現に當時の神社建築の形式が今日まで現存してゐるからである。即ち伊勢の神宮と出雲の大社、及び攝津の住吉神社がそれで、何れも當初の形式を追つてゐる。勿論二千年近くを経てゐるのであるから、種々進歩した所はあるが、神宮は最も當初の形式を多く存し、平面は勿論、構造、形式殆んど昔日の儘である。大社は平面は昔の通りであるが、構造は大分進歩して居り、住吉神社は大社造の進化したものである。

神社建築は、當初のものこそ残つてゐないが、かく三種の最初の形式が現存してゐるので、原始時代の建築と云へば、神社建築が主であるやうに見えるが、實際は、宮殿建築も神社建築と並んで、或はそれ以上に盛んだと考へるのが至當である。

宮殿建築は形式もわからず、神社建築はたゞ形式のみ明かなのに比べて、實物の

残つてゐる建築的遺物は墳墓である。これは十分發掘もされず、従つて調査も研究も進んでゐないやうであるが、ある事は澤山あつて、或は土饅頭形、或は前方後圓の形をなし、内部の石櫛は建築的構造を持つて居る。而して我が國の建築が、原始時代から江戸時代に至るまで、全部を通じて木造、即ち植物的材料を用ひてゐるにも拘らず、この墳墓には礦物的材料が用ひられてゐる。これは東亞諸國の墳墓を通じて同様で、形式も亦共通のものである。建築としては勿論重要なものでないが、遺物がある點と、材料が礦物性である點と、形式の系統とが注意すべきものである。

飛鳥時代

飛鳥時代になると、佛教の輸入につれて、忽然として佛教建築が出現した。而してそれは建築としても非常に立派なものであつたので、從來の神社も宮殿も殆んど眼色なく、飛鳥時代の佛教建築に對しては、原始時代の神社建築も、太陽の前の星のやうな有様であつた。しかも其の太陽の如き建築が現存してゐるのであるから、

星の様な建築の形式位が傳へられてゐても、殆んど無きが如くである。故に我が國の建築は飛鳥時代に始まるとしても大した差支はない譯である。

さて飛鳥時代に輸入した佛教は、三論、成實、法相、俱舍の四宗で、之れに華嚴、律を加へて、俗に南都六宗と云ひ、今は便宜上「南都佛教」と名づけた。即ち飛鳥時代の佛教建築は、この南都佛教の建築であつて、所謂七堂伽藍完備し、それが嚴正な左右均齊シムメトリの配置をとつて平地に建立されたのである。而して此の敷地の平地である事が、南都佛教建築の特色の一つであつて、平地であればこそ七堂伽藍が整然たる配置をとり得るのである。故に飛鳥時代の佛教建築は、又別に「平地佛教建築」と云ふ事が出来る。

此の南都佛教建築の特色は、今も云ふ如く平地に敷地をもとめ、七堂伽藍整然たる配置をとるのであるが、其の中心となるものは、金堂及び塔婆であつて、講堂、食堂、經藏、鐘樓等その周圍に置かれ、廻廊が主なる堂宇を廻つてゐる。其の構造

は非常に發達し、大體の格好、細部の手法に至るまで、千年の後余等を驚嘆せしむる程に傑れてゐる。これ畢竟支那に於いて發達し、更らに朝鮮に於いて熟したものが我が國に傳はつた爲めであらうが、支那にも朝鮮にも當時のものが無い今日では、獨り我が國の誇となつてゐる。併し建築家は主として朝鮮から來朝したものであつて、我が國の工匠がこれに學び、之れを補助したに過ぎないかもしれない。併し支那や朝鮮に於いては主として石造であつたらしい所から見ると、我が國に來て純木造となつた以上は、其處に我が工匠の力が大に加はつたと考へられる。何となれば、木造建築としては、原始時代數百年の間に神社、宮殿の建築が或る程度の發達を遂げ、それは無論我が國の工匠の手に成つたものであるからである。即ち神社、宮殿に於いて相當の手腕を持つてゐた建築家が、發達せる佛教建築の輸入に會つて、忽ち腕をあげ、彼の傑作を作り出すのは強ち無理の事でもあるまいと思ふ。尤も原始時代に於いても神功皇后の朝鮮征伐の頃から朝鮮の建築術は我が國に入つたので、飛

鳥時代は第二回の輸入である。

宮殿建築も原始時代よりは進歩したに違ひないが、これは矢張遺物が無いので明かな事がわからない。神社は、原始時代の三種の形式を踏襲してゐた迄である。即ち飛鳥時代は南都佛教建築が、前代の神社建築及び宮殿建築に代つて覇を稱した時代である。而して其の遺物としては、有名な法隆寺の金堂、五重塔を始めとし、其の中門、廻廊、法輪寺及び法起寺等の三重塔等がある。

奈良時代

奈良時代は飛鳥時代の繼續であつて、前代に盛んであつた南都佛教建築は益々盛んとなり、聖武天皇の御宇には其の絶頂に達したが、此の時代に非常な勢で勃興したのは、宮殿建築である。從來宮殿建築の比較的振はなかつた原因は、代々の天皇が其の宮城、皇居を移された爲めで、一代々々新築せらるゝが故に大規模の經營が困難だつたのである。然るに奈良時代となり、寧樂の地を相して平城京を建て、こ

れを永代のものとする御考で、盛んに宮殿、皇居を經營し、殊にそれは唐の長安城を範としたので、非常に立派なものが出来上り、佛教建築と相並ぶ勢となつた。併し佛教建築には及ばない、何しろ天子自ら佛法に歸依し、三寶奴と稱し玉ひ、寺を以つて護國之寺と號する位であるから、佛教建築は宮殿建築よりも盛んであつた。

奈良時代の佛教は、前の四宗に加ふるに華嚴、律の二宗が傳來し、茲に南都六宗となり、平地佛教は極盛に達したのである。其の代表的伽藍は云ふまでも無く東大寺であつて、聖武天皇の勅願になり、天皇親ら土を運ばせ玉ひ、國帑を傾けて、大佛及び大佛殿其の他の堂塔を建立され、これを金明光四天王護國之寺と稱し、八宗兼學、總國分寺とせられた。而して各國には國分寺を置かれ、更らに國分尼寺を設け、法華寺を以つて總國分尼寺とせられた。其の外、寧樂に遷都せらるゝと共に、諸大寺も悉く新市に、更らに大規模に經營され、其の建築は今日迄も、藥師寺、唐招提寺等に遺つて居り、規模は興福寺、西大寺其他によつて窺ふ事が出来る。何れも平

地に在つて、金堂を中心とし、七堂伽藍整然たる配置をとつてゐた。其の有様は、ほゞ前の飛鳥時代と同様で唯規模の大なのと、塔が些か殿堂の中心から遠ざかつた事と、構造に於いて益々巧妙となり、裝飾に於いて益々豊麗となつた事が變つた位である。

此の奈良時代には、もはや朝鮮の媒介を待たずに、盛んに唐と直接交通をなし、或は唐に留學し、或は唐から來朝したのもあらう。建築家の如きも或は彼の地に學んだものもあらうし、彼の國の工匠の來つたものもあらう、之れに學んだものも亦多かつたに違ひない。併し前代より一層我が國の建築家の力が進み、之れによつて平城京の宮城、皇居を始め、諸大寺が建築された事は想像に難くない。而して當代の佛教建築の特色は、前代と同じく南都の平地佛教建築であるが、規模の雄大な事は、東大寺大佛殿が、世界第一の木造建築であるといふ一事で明かであり、裝飾の豊麗な點は、今日の想像に及ばない位であつたらうと思ふ。よく人は藤原時代の

淨土建築に至つて、裝飾が殊に豊麗になつたやうに云ふが、奈良時代も決して藤原時代に譲らない。唯奈良時代のもものは時代が古い爲めに、或は剝落し、或は褪色して、地味にさびて見え、藤原時代のもものは比較的時代が新しい爲めに、剝落や褪色の度が尠く、派手に見える丈けである。

要するに奈良時代の佛教建築は、單に南都佛教建築として、奈良時代に覇を稱へてゐる計りでなく、日本建築史上に於いて佛教建築の最高潮に達した時であつて、世界に於いても著名な佛教建築の一黄金時代を現出したのである。而して宮殿建築は、前述の如く勃興したが、神社建築は上世と中世との間に位して大した勢もなく、唯住宅建築は、新都の經營に伴つて多少發展したと想像されるが、精確な事はわからない。

弘仁時代

弘仁時代に於いて又振つたのは宮殿建築である、宮殿建築は前代に於いて、寧樂

の都を永久の豫定で新都を經營になり、宮城、皇居も建築されたが、僅かに七代にして、又遷都といふ事になり、今度は平安京を經營された。前には平安京が唐の長安城を範とし、之れを改良して作られたのであつたが、今度は二度目であるから、一つは唐の長安城に、一つは我が平城京の宮城に、兩方から長をとり短を捨て、平城京より一層大規模に經營された。而して爾來明治に至るまで、一千年の間遷都の事がなく、すべて弘仁時代のあとを追ふたのであるから、明治以前に於いて、宮殿建築の極盛期は此の時にあつたのである。

翻つて佛教建築を見るに、前代及前々代に大勢力を振つた南都佛教建築は、南都佛教のやゝ衰ふると共に勢力を失ひ、新たに勃興した天台、眞言の二宗が勢を得ると共に、建築も亦この天台、眞言の二宗の建築が勢を得るに至つた。建築はすべて社會や時代を背景として生ずるものであるから、佛教建築が各種の佛教の盛衰に伴つて消長するのは當然の事であるが、我が奈良時代に於いて、南都佛教の盛んな時

に、南都佛教建築が榮え、弘仁時代となり南都佛教の衰ふると共に、其の建築も亦勢を失つたのは、其の明かな實例である。

南都佛教に代つて勃興した天台、眞言の二宗は如何なる宗派であるかと云ふに、かれが顯教であるのに反してこれは密教である。かれは單元的支那佛教であるのに反して、これは複元的日本佛教である。同じ佛教でも可なり違つた特色を持つたものである。即ち其の建築も違つた特色を持たざるを得ない。然らば其の特色は如何なる點にあるかといふに、最も主な點の一つは、彼が平地佛教であるのに反して、これが山地佛教である點にある。平地佛教建築の特色たる整然たる配置といふ事は、山地佛教となつて全然用ひられなくなつた。山地なるが故に、其の高低、樹木の工合などによつて堂塔は隨所に配置せられた。次に兩者の差は平面プランに現はれ、次に裝飾に現はれた。併しこれらの差を説明する事は今の目的でないから、唯南都佛教建築と密教建築とは、佛教上顯密の差がある様に、建築にも差のある事がわかればよ

いのである。

而して密教建築としては、各時代中最も盛んであつた。天台宗は比叡山の延暦寺、真言宗は高野山の金剛峯寺を兩大關として、多くの寺が建てられたが、其の遺物は遺憾ながら尠い。比叡山高野山とも當初の建築は一つもなく、唯僅かに真言宗に屬する室生寺の金堂と五重塔とを遺してゐるのみである。

次に神社建築は、當代頃から新しい形式を生じた。それは住吉造の系統から生じた春日造と、神明造の系統から生じた流造とである。共に上世の神社建築が佛教建築の影響を受け、純粹に我が建築家によつて創造されたものである。殊に流造なる形式は、宮殿、神社、佛教等の各建築を通じて最も日本的の形式表現を持つたもので、爾後各時代を通じて神社には此の形式が屢々用ひられ、今回建てらるべき明治神宮本殿も、亦此の形式による事になつてゐる。で神社建築は、當代に於いて中世神社建築として、神社建築の一新流を興した事になるのである。猶當代には新都の

經營から考へて、住宅建築も相當に發達したらうと思はれるが、次代に於いて一層の發展を示すから當代は暫く預つて置く。

で要するに弘仁時代は、宮殿建築を最も盛んとし、密教建築も亦これと伯仲し、神社建築は一新流を作つた點で注意を要する。

藤原時代

南都佛教一度衰へて密教新たに勃興し、其の建築が盛んに行はれたが、藤原時代に入るに及び佛教に又一新流派が興つた。それは云ふまでもなく淨土教であつて、建築も亦此の新しい流派のものが盛んとなつた。即ち淨土教の本尊阿彌陀如來を安置する阿彌陀堂建築がこれである。淨土教は密教と違つて、頗る晴れやかな宗旨であるので、其の建築も密教の建築とは大分趣が變つた。其の主なる相違は密教が山地佛教であつたのが、淨土教は再び平地佛教となつた點にある。併し平地は平地であるが、南都六宗とは又趣が異ひ、そのやうに七堂伽藍整然たる配置をとるとい

ふ事は無い。寧ろ密教建築が自然の地勢に従つて隨所に堂塔を配置した如く、淨土教建築も、平地ではあるが自由に配置し、自然の風景との調和に顧慮した。第二に平面が違ふ。第三に内部が晴れやかになり、裝飾が非常に豊麗となつた。それから屋根の勾配が緩くなり、優美な表現となつた。これらの委しい説明も今は省くが、或る點では南都佛教の顯教の建築に還つたやうな所もあり、又新しい點もあるので、新しい點は、一つは南都佛教建築には、唐の影響が多く、淨土教建築には、我が國の同化力が強く現はれる所から來るのである。

この淨土教建築としては、有名な六勝寺の外法成寺などもあつたが、皆亡びて跡もない。併し其の以外で中々立派なものが残つてゐる。例へば平等院鳳凰堂の如きは、淨土教建築中の代表的のものである許りでなく、日本建築中の傑作である。其の他法界寺阿彌陀堂、中尊寺金色堂等がある。

住宅建築は、前代までに二度の新都經營に伴ひ、格段な進歩をしたらうと思ふが

遺物は固よりないし、確かな證據が無いのでわからなかつた。然るに當代に至つては、貴族の間に皇居の建築から胚胎した一種の形式が大成した。それは所謂寢殿造で、茲に至つて住宅建築が、佛教建築や神社建築と共に日本建築の主な流れとして擧げ得るのである。併しこれも遺物は一つもなく、唯記録か繪畫等で彷彿し得るのみである。

神社建築は、前代に出來た春日造、流造の外に、日吉造、八幡造が現はれたが、特に振つたとも思はれぬ。唯當代末期に建てられた嚴島神社は、其の規模の大にして、平面の複雑せると、自然の風景を巧みに結合調和せる點とで、前後に比類なきものである。宮殿建築は數回の炎上で、一々再建はされたが、舊觀に優るといふ譯にはゆかなかつた。で要するに藤原時代は淨土教建築が最も振ひ、次では寢殿造なる住宅建築が振つた時代であると云はねばならぬ。

鎌倉時代

佛教は飛鳥時代以來幾多の流派が傳來され、又我が國で日本化されたが、鎌倉時代に至つて又新しい一流派が傳來した。それは禪宗であつて、從來行はれた佛教とは大に異なるものである。而して新しい流派の宗旨には、又新しい形式の建築がなければならぬ。即ち當代に至つて禪宗建築が勃興し、次代に及び、所謂五山十刹など建立せられた。其の特色は前の諸佛教建築と大に異つてゐる。敷地は、南都佛教淨土教などと同じく平地であつて、其の配置も再び南都佛教と同じく整然たるものとなつた。而して平面は固より何れとも異り、細部や裝飾には種々の相違があるが、それは例によつて説明しない。唯禪宗建築手法を「から様」と云ひ、從來の手法を「和様」といふ事と、繪様えやうくりかた線形等、彫刻を建築に應用する端が茲に開かれた事とは注意せねばならぬ。尤も遺物は鎌倉圓覺寺の舍利殿一箇あるのみで、禪宗建築の大きな遺物は、次代以後のものに多い。

猶當代には南都佛教建築で再建や修繕されたものが頗る多い。再建では東大寺を始めとし數多く、修繕の如きは頗る澤山ある。而して東大寺の再建に當つては「天竺様」なる一種新しい手法を輸入し、其の手法の建築が多少建てられた。又「天竺様」でなくても、當代の修繕には、古いものに對して、かまはず鎌倉風を用ひたもの多く、随分奈良時代の建築の柱丈け、又は組物丈け鎌倉風にしたものがある。又建増しの場合なども、前の部分に關せず鎌倉風にしてゐる。其の著しい例は東大寺の三月堂で本堂は天平風、禮堂は鎌倉風である。それから「天竺様」とも違ひ、全く一つ丈け違つた手法の建築は東大寺の大鐘樓である。併しそれらは皆小支流で、主なる流は、「から様」の禪宗建築である。

住宅建築は前代に寢殿造が現はれて始めて日本建築の一支流として認められて來たが、當代に於いては武家の勃興と共に、武家造なる一形式が現はれて來た。それは主として關東の武家に行はれたので、京都では矢張寢殿造が行はれてゐたのである。武家造は名の示す如く武家の住宅で、家子郎黨など多くの武士の出入に便にし、又

敵に具ふる垣などの用意も出来てゐるが、甚だ質素なものであつたらしい。宮殿建築と神社建築とは何れも大して振はなかつたやうである。

前に當代の佛教建築に、在來の「和様」と、新來の「から様」と「天竺様」とある事を述べたが、この内「天竺様」は、幾何もなく「和様」に攝取されて「折衷派」を生じ、又それが「唐様」と合同して、第二の「折衷派」を生じた。即ち鎌倉時代には以上五種のもものが共在した譯であるが、「天竺様」は「和様」に攝取されて第一に消滅し、その折衷したものも亦、「から様」と合して「第二の折衷派」を作つたので、結局、「和様」、「から様」「第二の折衷派」、此の三種となつて了つたのである。而して此の三派は次代にも繼續して行つた。

室町時代

室町時代は、佛教建築は禪宗の繼續であつて、其の遺物は中々多く、南都佛教建築の再建も興福寺の東金堂、五重塔、法觀寺の五重塔其の他があり、折衷派にも鶴

林寺本堂を始め、澤山の遺物がある。併し大體の流としては禪宗建築を擧げねばなるまい。

神社建築は、藤原時代までの中世神社として既に神明、住吉、春日、流、日吉、八幡の六形式を生じ、後暫く眠つてゐたやうであつたが當代は又活躍し、前記の各形式が自由に種々結合されて多種多様の新形式を生じ、遺物も中々多い。例へば土佐神社は、本殿の外に幣殿、拜殿、左右翼廊等、皆聯絡して建てられ、それが次代となつて權現造となる先驅をなしてゐる。而して繪様線形の應用漸く盛んに、彫刻と色彩と金具の裝飾とが頗る多くなつてきた。

住宅建築は一方で前代の武家造が続いてゐると共に、寢殿造も猶繼續して居り、別に兩者の折衷の如き書院造が現れかゝつてゐる。又茶室も始まりかゝつてゐる。併し當代に於いて最も注意すべきは住宅に禪宗建築を加味し、庭園と結合した一種の建築の現はれた事で、余はこれを庭園建築と名づけてゐる。其の遺物としては有

名な金閣と銀閣とがある。

で室町時代の建築は、全體としてあまり振はない方であるが、まづ禪宗建築と神社建築とが主であつて、書院造と茶室との萌芽がある事は注意すべき點である。

桃山時代

桃山時代になると、佛教建築は豊臣秀吉の方廣寺建立や諸寺の再建などもあつたが、新しく傳來した宗派もなく、新たに勃興した宗派もなく、建築としてはもはや佛教建築の時代が過ぎて了つたのである。而して之れに代つて起つたものは何かといふに城廓建築と書院造とである。我が國には從來城廓建築と云ふ程のものもなく、かの戰國時代にも未だ城廓建築は進歩しなかつたのであるが、天正四年織田信長が安土に城を築いてから僅か二三十年の間に諸國に數多の城廓が建築せられ、忽ちにして建築界の覇を稱するに至つた。しかも次の江戸時代に至つては徳川氏の禁止する所となり、世は太平に歸して城廓の如きも毀たるゝのみとなつた。全く我が國の

城廓建築は、忽然として興り、忽然として姿を沒したので、しかも興つたのが桃山時代で、衰へたのも桃山時代を終つて間もなくである。それは宛も一世の英雄豊臣秀吉が忽ち興り忽ち衰へたのと同様で、これは兩者の暗合でなくて、英雄が時代を作り又藝術を生んだ顯著な一例である。

城廓建築は周圍に深き濠を廻らし、石垣を築いて、地域を限り、其の内に五重若しくは七重の天守を建て、更らに廣大な書院造を建てた。城廓建築としては天守が主なもので、周圍の石垣に開いた門にも特色があり、書院造は住宅の方に屬すべきものである。而して其の天守は從來の宮殿建築にも佛教建築にも全然なかつたもので、全く別の趣を有し、大體の格好や白塗の壁で、一種の美觀を呈するものである。最も壯大を極めた大阪城は大部分毀れたが、名古屋城、江戸城、熊本城、姫路城其他數多の遺物があつて、今も桃山時代の建築の覇者としての威を示してゐる。

書院造は前代から起つてゐたが大成したのは當代である。書院造は多くの棟を自

由に結合した住宅建築で、主なる處を書院と云ひ、我が國の建築としては最も廣い部屋を持つたものがある。例へば現存のものでは京都西本願寺の書院（鴻之間）の如き桁行十一間、梁間九間あり、舊江戸城の大廣間の如きは二百疊敷と稱されてゐる。而して上段の間と稱して一段高い所があり、其處には床間、書院橋、帳臺構を有し、繪畫、色彩、彫刻、金具の裝飾豊富に用ひられ、繪畫裝飾の如きは最も雄大の手法を發揮してゐる。この西本願寺の書院は桃山城の遺構であるが、醍醐の三寶院も亦書院造の代表的のものである。

佛教建築は前述の如く方廣寺大佛殿の如き大規模のものも建てられ、又再建としては東寺金堂、大徳寺及妙心寺の三門、園城寺金堂、延暦寺横川中堂、本門寺五重塔等があるが、新しい宗派もなかつたので、別に大した特色もなく、構造、裝飾等に多少の特色があれば、それは城廓や書院造が一層著しく有してゐる特色に過ぎない。神社建築は前代に於いて各種新しい混合形式が試みられた結果として當代には權現

造が大成せられ、其の主なものとしては北野神社、大崎八幡神社が遺つてゐる。其の特色は、本殿と拜殿との間を石の間又は相の間で聯絡した點に在つて、裝飾の豊富な事は書院造よりすつと優つてゐる。

當代は城廓、書院造の豪放、神社の豊麗なものがあつたのに反して、瀟洒淡泊な茶室建築がやゝ勃興して來たのは、面白い現象である。茶室も前代に端を發してゐるが、盛んとなつたのは當代以後の事である。殊に千利久が出てから、茶室の範を造つた。併し茶室建築は要するに一支流に過ぎない。當代の本流は住宅建築に於ける書院造と、神社建築に於ける權現造とである。猶當代にはほんの一寸であるが、基督教建築が現はれた。

江戸時代

江戸時代に入ると、桃山時代に覇を握つた城廓建築も忽ち衰へた事前述の通りであるが、神社建築の權現造が益々盛になると共に、其の系統でありながら、茲に全

く別種の意味の建築が現はれた。廟建築が即ちこれで、其の形式は大體權現造であるが、佛教建築の意味もあり又神社建築の意味も加はり、墳墓の意味も入つてゐる。尤もこれも前代の豊國廟に於いて既に端を發し、當代になつて大成し、しかも當代の初期丈で消滅してゐる。意味の上から前後になかつた建築で、しかも其のあつた時代の短かつた事は、前代の城廓建築に似てゐる。

廟建築は本殿と拜殿とを石の間で聯絡し、これを主建築として、他に唐門、水舎、神庫、透扉など附屬し、それらが大體整然たる配置をとり、裝飾は日本建築中最も華美に豊富に施されてゐる。遺物としては日光東照宮を始め、芝臺徳院廟其の他がある。

城廓建築の禁止と共に宏大な書院造も尠くなつたが、當代初期には猶ある。例へば二條城の如きは其の代表的のものである。併しさう云ふ大書院造は間もなく衰へて、各國の大名の屋敷及び江戸の大名の邸宅、旗本の住宅を始め、諸民の住宅など

が江戸時代中葉から大に進歩し、我々が今日普通住む家の先驅をなしてゐる。これらの住宅は、其の一つをとつては大したものでもないが、數が多くして都市建築の大部分を形成してゐるものであつて、決して輕々しく見る事の出來ぬものである。

佛教建築は前代の如く再建が主で、其の遺物には、東大寺大佛殿、南禪寺三門、清水寺及智恩院本堂、延曆寺根本中堂、東寺五重塔、淺草寺本堂及五重塔等があり、創建には寛永寺がある。併し佛教建築は、前代から既に其の勢力を失つてゐる。儒教建築も一寸起つたが大した事もなく、僅に湯島の聖堂に遺物を止めてゐる。

桃山時代までの建築には、随分種類もあるが、所謂公共建築と云ふべきものはなかつた。然るに當代の中葉から劇場建築が勃興し、又學校建築もぼつ／＼興つた。商店建築も亦當代から少しく特色を持つて來たやうである。之れを要するに江戸時代は、既に佛教建築の時代でなく、廟建築も一時勃興したが本流とは云へないし、住宅建築が書院造から漸次普通の住宅として彌漫し、同時に從來潜んでゐた商店建